

---

# 真紅の瞳に映る世界

狐と狸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真紅の瞳に映る世界

### 【Nコード】

N77030

### 【作者名】

狐と狸

### 【あらすじ】

様々な出来事がかさなり異世界に飛ばされる事になった受験真つ只中の高校3年生、赤羽龍也。

彼は、異世界で何を求め。何をするのか？  
そして、彼の瞳に映るものとは？

異世界ファンタジー開幕です！！

主人公、なかなか強いです。

つというか徐々にチートっぽくなると思います。

少々グロテスクな表現が含まれますので苦手な方は注意してください。

しばらく編集作業を中断しておりましたが再開しました。  
現在、10話まで編集済です。

## 第1話 最後の日（前書き）

皆さん、こんにちは!!

うまく書けるかわかりませんが、頑張りますので温かく見守っていただければ幸いです。

## 第1話 最後の日

俺の名前は赤羽龍也。あかばねたつやどこにでもいる高校3年生だ。

受験という名の呪縛に囚われている。そして、着々と迫る受験に対して先もわからない道をただひたすら前に向かって歩いて歩んでいる。

別に受験などどうでもいいのだが、周りの雰囲気の流れに流されつつある。

そんな俺は昔から運動も勉強も平均的。他の皆より目立つわけでもなく存在感が無いわけでもない。

黒髪に、茶色の瞳、身長168cmと少々小柄な体格の一般的な格好。

そう、俺は普通。普通の男子高校生だ。

え？なんで、こんな話をしてるのかって？

それは、俺のことをできるだけ多くの人に覚えておいてもらいたいからだよ！

もう、みんなとは会えないみたいだし・・・。

時は3時間ほどさかのぼる・・・。

\*\*\*

キンコンカーンコン。カーンコンキンコン。

学校。それは青春時代の宝箱。

学校。それは愛と希望に満ちた楽園。  
学校。それは勉強という名の暴力を振るう監獄。

今、俺は学校にいる。

正確に言つとだれも周りにいない学校で最も高い場所。つまり屋上にいる。

なぜかつて？

高校3年生の9月といったら受験が徐々に迫ってきて周りがピリピリしだす時期だ。

そんな中、受験なんてどうでもいいと思っている俺が周りの雰囲気能耐えられるわけもなくそそくさと教室から脱出してきたのだ。

まあ、屋上といえるからといって別に、カップルがイチャイチャしているところに行くわすわけでも、不良に絡まれているわけでもない。ただ、なんとなく寝そべって空を眺めていた。

「受験して、大学は行って、就職して、あわよくば結婚して、子供ができて、老後を迎えて・・・そして、死ぬ。人生詰まんものだな・・・」

つと、何かを悟ったような人のセリフをつぶやいてみる。

まあ、実際何度もそう思ったことはあるし、失恋したときには自殺を考えたこともあった。

だが、結局この運命からは逆らえない。それが現実つてものだ。

『現実を見る。』

親にも先生にも塾の講師にも言われるセリフ。

現実のどこがいいのだろうか？

かといって空想を肯定する気は無い。

アニメや漫画、そしてドラマや映画。

確かにあこがれたことは何度もあった。

銃弾を踊るように避けたり、未来から来た機械と戦ったり……。

しかし、ここは日本。

銃などアメリカに行ったときに少々撃つたことがある程度。  
映画のヒーローからは程遠い。

「退屈だ……」

これが最近の俺の口癖。

親いわく、退屈なら勉強しろ、1単語でも多く覚えなさい。  
まあ、言いたいことあはわからなくはないが……。

今日もいつもと同じような日になるだろう。

そして、明日も、明後日も、明々後日も……。

「よつと」

寝転んでいた俺は、立ち上がり教室に戻ろうと屋上の扉へと向かう。

教室の中は静かだった。

いや、ある意味うるさいことはうるさいのだが。

「数学的帰納法によりこの部分は……」

「Harry has not meant to say that at all, and……」

「太祖大イニ怒り、其ノ・・・」

「寛政の改革によって、江戸は・・・」

そう、この雰囲気、atmosphereについていけない。  
つというかついていきたくない。

今日の午後は授業ではなく自習時間。

皆、それぞれの参考書を手にブツブツつぶやいている。

そんな中、俺は携帯で棒人間が自転車に乗って障害物を避けながら走っていくあのゲームの自己ベストに挑戦していた。

「・・・つく。あと、78mだったのに・・・あそこで3連続とはな・・・。」

噂のチャ 走である。

自己ベストが出るころには下校時刻になっており、気の会う仲間（馬鹿）x3と帰路に着く。

いつものようにたわいも無い話をしながら、大通りに沿って歩いていく。

「いや、あのグラビアすごいんだって！もう、見てるだけでさあ・・・。」

「はいはい。お前の趣味はわからん。それよりさあ、あの妹と兄のアニメ・・・。」

こいつらとはなんだかんだで3年の付き合いだ。家も意外と近いので自然と仲良くなった。

そして、毎日のように引つかかる横断歩道のところで立ち止まる。



信号は赤。

あの人が歩くマークのデザイン変わらないかなあ、などくだらないことを考えているうちに信号が青になった。

反対側の歩道から一人の女子高生が歩いてくる。

スタイルもよく、モデルといわれても納得できただろう。その子と目が合ったような気がした。

その時、大通りを1台のトラックがものすごいスピードで走りながら俺らが渡ろうとしていた横断歩道に突っ込んできた。

「……危ない！……」

俺以外の3人がそう叫びながら前に飛び出した。そして、3人で女の子を抱くような構図のまま歩道のほうに飛んでいった。

キイイイイーーーーー。ガゴオオオン。

・・・トラックはなぜか直前で大きく曲がった。  
そのおかげで3人+女の子には怪我1つ無かったが・・・軌道が変わったトラックはそのまま歩道に突っ込んだ。  
つまり、歩道にただ一人佇んでいた俺にトラックは突っ込んだのだ。

\*\*\*

そして、話は冒頭に戻る。

『地獄絵図』

この言葉が相応しいだろう。トラックによって跳ね飛ばされた俺の

身体は、空中を舞いながら商店街の壁に激突する。そのまま、跳ね返り再び車道に投げ出された俺の身体を乗用車が轢く。手が千切れ、歩道のほうに飛んでいく。そして、転がりながら反対車線を走ってきたダンプカーに轢かれ内蔵があふれ出しているところすべての車の流れは止まった。

今、俺はこの景色を空中から見ている。

どうやら、撥ねられた時点で即死だったようだ。

後からやってきた救急隊員が俺の身体の肉片を集めている。

同時に、警察が周りに事情聴取を行っている。

吐き気を催す勢いだが幽霊？になった俺にそんなことはできない。

先ほどまで、話していた友人たちは凍り付いて、女の子は放心状態になっている。

まあ、そうだろう。

目の前に手足が細分化されたものが転がっている上、内臓が血液とともにあふれ出しているのだから・・・。

「俺も幽霊か。これで、女子更衣室に入り放題だな。」

などと、男子なら一度は考えるであろう妄想をする。

「・・・にしても、死んだのか俺・・・。」

死体の処理をしている警察と写メを取っている野次馬を見て、ため息をつく。

「なんか、散々な人生だったな・・・。結局、一度も彼女も出来なかったしなあ…。好きな女の子はいたけどさw」

そんなことを考えながら、ふわふわと宙に浮かんでいると目の前に金の金具で縁取られた黒い扉が突然現れた。

「なんだ、これ？」

一瞬考え込むような動作をした俺だったが、すぐに悟った。

「あ、これは天国への入り口だな！！よかった地獄じゃなくて。。

」

そっぴいながら、勢いよく扉を開け放った。

そして、中へ飛び込んだ。

・・・が、床が無かった。

え？幽霊なんだから平気だろって？

違うよ・・・扉を開けた部分で気がついたんだが、この扉内部では物に直接触ることが出来るのだ。

そう、足を踏み入れて床が無ければ当然・・・落ちるのだ。

「え？うわああああー！！。。。。。」

落ちる・・・。落ちる・・・。まだ、落ちる・・・。落ちる・・・。落ちた。

しかし、不思議と痛くはない。

まあ、死んでいるから当たり前前の気もするが・・・。

「ようこそ。地獄へ。」

後ろから突然、声を掛けられ戸惑ったが、その内容のほうで俺を驚かせた。

「地獄？」

そっぴいながら振り返ると一人いや、一体の骸骨が立っていた。

地獄。確かにそうなのかもしれない・・・。

空が赤く、地面には地割れの跡。そして、絶えず聞こえてくる絶叫。何より目の前に立っているのは天使でなく骸骨なのだから・・・。

本や、マンガとは違って鬼がいるわけでもなければ人が八つ裂きにされているわけでもない。ただ、俺と同じような幽霊達が、石造りの椅子に座っているだけだ。

そして、椅子に座った幽霊達が何かに脅えるように絶叫していた。

「君も、ここに座ってね。抵抗はしないように。」

骸骨がそっぴいながら笑ったような気がした。

そして、言われたとおり椅子に座る。

すると・・・頭に軽い衝撃が走り、目の前が真っ暗になった。

黒。

闇。

黒。

トラックが真っ直ぐ、俺に向かって突っ込んできた。

キイイイイイイー。

ドカツ。

俺の身体は宙を舞い。地面に叩きつけられる。

身体中に激しいなんてものじゃない、焼けるような痛みとともに身体がバラバラになっていく・・・。

首、腕、指、足・・・そして内臓

もともと俺という身体だったもの、収まっていたものだ。。。

それが道路に散乱する。

友人が口を押さえる・・・。

「うがあああつああ。」

死んだときには感じなかった痛みを感じる。  
俺は、あたり構わず叫び続けた・・・。

そして、目の前が真っ暗になった。

黒。

闇。

黒。

トラックが俺に向かって突っ込んでくる。  
居眠り運転をしているのかこちらに気づいていないようだ。

そして・・・  
キイイイッイイッイー！

ドカッ。

俺の身体が宙を舞う。

身体が肉片というただの物へと変わっていく。

激しい、いや、普通なら死ぬだろう痛みが身体を襲う。

「うわあああああああ」

焦点が定まらないまま叫び続ける俺。

そして、視界がまた暗くなる。

黒。

闇。

黒。

1台のトラックが・・・

\*\*\*

「オーランが禁忌を犯しというのは本当ですか!?!」

「そのようです。そのせいで、人間界に影響が……。」

「オーランのはどうなりました？」

「禁忌を犯したものは、言い伝えどおり砂と化しました。」

「そうですか……。それにしても、あのオーランが禁忌を犯すとは……。」

「そうですね……。あ、被害者はどうしましょう？」

「被害者？何人いるの？」

「1人です。」

「1人？その方は天界で、最高のもてなしをしましょう。早速、呼んで下さい。」

「いや……。それが……。何かの手違いで、その者は今、地獄にいるので……。天界へは無理かと……。」

「地獄ですって！！早く！早く連れ戻さない！！」

「は……！しかし……。地獄に落ちたものは天界には連れて来れないのでは……。」

「……。境界に連れてきなさい。精神崩壊してなければの話ですが……。」



「早速、連れてきます。精神崩壊していた場合は諦めますがいいですね。」

「構いません。その方に悪いですが、しょうがないでしょう。地獄での1秒は人間界での1日に当たりますから……。その方は感覚的には10年近く、地獄にいる気分でしょう……。」

「はっ。では、行つてきます。」

\*\*\*

何日、何年経つただろうか……。

事故のシーンを何回、何十回。何百回。繰り返された。

それが終わり安心したのもつかの間、家族や友人、自分が好きだった女の子から罵声を受けた。

だが……。

徐々に罵声は暴力へ変わっていき、最後はナイフや拳銃を持って襲い掛かってきた。

俺はただ、叫んで逃げ回った。

しかし、頼んでもやめてくれない。ついには殺しかかってきた。

刺される。撃たれる。普通なら致命傷だ……。

だが、痛みは感じて傷は出来ない。そのため、死ぬことはない。

「これが地獄なのか……。」

いつしか、それらを受け止められるようになっていた。

なぜか・・・。

自分でもわからない・・・。

だが、1つだけ解ることがある。

自分がどんなに痛みを受けようと、殺されそうになると、それは客観的なことにしか思えなかったのだ。

えっ？どうしてかって？

それは、何度も繰り返された部分が、おかしかったのだ・・・。

トラックが俺に突っ込んできたのは事実だ。

しかし、トラックは友人たちが助けようとした女の子に向かって突っ込んでいったのであって、俺に直接突っ込んできたのではない。

そのことに途中で気づいてしまった俺は、これは夢のようなものだと思ってしまったのだ。

そして、そう確信してしまった瞬間・・・俺は光に包まれた。

\*\*\*

私は、椅子に座っている1人の少年を見て思う。

地獄に捕らえられ何世紀になるかわからない私。

元々は、人間だったのか？雄だったのか？雌だったのか？それすらも覚えていない。

ただ、地獄の案内人を務めてきた。

そして今、目の前で見たことも現象が起こっている。

『死の眠り』

と呼ばれる地獄。

落とされた人を眠りの中でその人が最も恐れていること、嫌なことが永遠と繰り返し返される。

永遠といってもたいてい、精神崩壊して砂と化してしまうのだが・・。

目の前の少年はパツチリと目を開け椅子から立ち上がったのだ。

「ありえない」

そう私は思った。

夢を見ているのかとさえ…。

まあ、夢など見れないのだが。。

だが、目の前の少年は立ち上がってこちらを真紅の瞳で見してきた。確か、連れてきたのは昨日だったはずだが、そのときは瞳は栗色だった気がする…。

何しろ人間で真紅の瞳など見たことがない。

そして、少年はこちらを見て口を開いた。

\*\*\*

「ここは、地獄か？」

目の前に立っていた骸骨に尋ねる。

なんせ、夢かなんかの世界に10年近く閉じ込められていたのだから、まず欲しいのは情報だった。

「…はい。地獄ですが。。どうやって、あなたは『死の眠り』から覚めたのですか？」

骸骨なので表情がよくわからないが口調から察するに驚いているようだ。

「『死の眠り』？　なんだそれは？　俺は夢のような空間の中でひたすら殺され続けたんだが？」

「それが、『死の眠り』なのですが・・・。目覚めた人間は今までいなかったで・・・。」

骸骨が言葉を言い切ることは出来なかった。

なぜなら、突如俺たちの立っている場所の近くに金色で縁取られた白い扉が突如現れたからだ。

音も無く扉が開き、中から天使としかいえない格好の青年が出てきた。

\*\*\*

「扉の手配に時間が掛かってしまった。彼は大丈夫だろうか？」

そっついながら、私は扉を開け放った。

扉から一步踏み出すと私のことを見つめている少年と、地獄の案内人の姿が目に入ってきた。

「探す手間が省けました。地獄の案内人の方ですね。天界の長、ミ

カエル様の命により1人の囚われ人<sup>グリード</sup>を解放して下さい。  
ちなみにこれは、地獄の長、アーカード様も合意の上です。」

「わかりました。番号と氏名を教えてくださいいただけますか？」

「Y - 24893。アカバナツヤです。」

ミカエル様から命令された際に渡された紙を見ながら私は答えた。

\*\*\*

扉から出てきた、青年と骸骨が何やら話している様子だったので黙っていたのだが、最後の言葉が気になった。

「赤羽龍也は俺だけど？」

咄嗟に反応して、答えてしまった。

「ん??」

2人。いや2体がこちらを同時に振り向いた。

「Y - 24893。確かにそうですね。この者です。」

骸骨に言われて青年のほうを向く。

「彼は何故、目覚めているのですか？ 先にこちらに伝令が届いたのでしょうか??」

青年が俺のことをチラリと見た後に骸骨に向きかえる。

「いえ。先ほど自力で『死の眠り』から覚めてしまい、どうしようかと考えていたところです。」

「そんな！！ 『死の眠り』 から覚めるなんてありえないことですよ…」

「そうなのだが。こちらにも判断が付かなくて…」

「…まあ。いいでしょう。彼は元々、死んだ後は天界に送られる人間でしたのでイレギュラーな事態が起こったのでしょう。」

青年と骸骨が俺の存在を完全に無視して会話を続けているのを見て徐々に腹が立ってきた…。

「なあ、俺がどうしたのか、いい加減説明してくれない？」

「…あなたは、ミカエル様が直接お会いになるそうなので、そのときに直接お聞きください。では、ミカエル様を待たせるわけには行かないのでこの辺で出発するとうしましょう。」

そういうと、いつの間にか消えてしまった扉の代わりなのか銀縁の扉をどこからか出現させ、青年がノブをひねった。

「では、案内人さん。後ほど書類のほうを持ってきますのでよろしくお願いします。」

そういつて青年が俺の手を引っ張るように扉の中に入ってしまった。

「俺の意思は関係ないのかよー!!」

つと文句を言いながら俺と青年は扉に入ってしまった。

## 第1話 最後の日（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想等ありましたらよろしく願います！！  
誤字脱字報告もありましたらお願いします。

## 第2話 境界（前書き）

昨日の続きです。

どうぞ ^^



## 第2話 境界

扉の中は光に満たされていた……。  
つというか、地獄が暗すぎたせいで目が慣れていないのかもしれない。  
い。

扉の中に入ると、またすぐに別の扉があった。  
そして、そこを抜けると青年と同じような格好をした女性が立っていた。

「あなたが、赤羽龍也さんね。」

「そうなんだけどさあ、さつきから全然状況が把握できてないから説明してくれない？まず、あんた達は誰だ？」

「随分な口調ですね……。まあ、いいでしょう。1から説明しましょう。」

そういつて、どこから現れたかわからない椅子に青年と女性は腰掛け、俺にも座るように促した。

それに、素直にに応じて女性が話し出すのを待った。

「まず、私の名前はミカエルと申します。大抵は、大天使ミカエルと言われますね。天界の長を務めています。こちらの青年はライコという、私の補佐をしてくれている天使です。」

ミカエルがそういうと先ほどのライコという青年が一礼してきた。

「天使っていうのは神とは違うのか？」

「神という存在は厳密には存在しないといつてもいいでしょう。つとというより、存在を認識することは不可能な存在です。そして、実際に人間界に干渉できるのは地獄の悪魔と天界の天使のみです。ですから、あなたたちのいう神とは天使であり、悪魔であるのです。」

「なるほどな…んで、なんでその天使の中の長である、あんたが直接俺なんかに会いに来たんだ?？」

「それは、ある天使が禁忌を犯したせいでああなたの人生が大きく変わってしまったので、その説明と謝罪をするためにあなたをここに呼びました。」

そういいながら申し訳なさそうな表情をした。

「禁忌？人生？」

「はい。禁忌とは字の如く、天界で禁じられていることです。今回はそれを破ったものがいました。名をオーランといいます。その天使は人間界に住む一人の女の子に好意を抱いておりました。ですが、その子の命は若いうちに散ってしまうはずでした。オーランはそれを受け入れることが出来ず、その子の人生を大きく変えてしまったのです。」

「なんだ？それはいい話じゃないか。ってか、その話と俺の人生に何のつながりがあるんだ？」

「そう思うのが普通ですね。では、もっとわかりやすく言いますよ。う。あんたが死ぬ直前に見たトラックの動きは覚えていますか？」

「ああ。地獄で散々、嘘の映像見せられたが、実際の動きは鮮明に覚えているぞ。」

「嘘の映像??」

女性がちよつと首をかしげながら俺に聞いてきた。

「俺は、トラックが横断歩道手前で急に左に曲がったせいではねられたはずなのに、地獄では直接突っ込んでくる映像ばかり見せられたんだ。」

「…そういうことでしたか。」

女性が何かに納得した表情をした後、ライコに何やら耳打ちした。

「なにが、わかつたんだ？」

「ええ。大体のことがわかりましたが、まず先ほどの話の続きをしますね。」

後ろにいたライコが再び扉を作成し、どこかに言ってしまったが気に留めなかった。

「ああ。ただ、後で何がわかったのかは聞かしてくれ。」

俺の言葉にうなずき、ミカエルは再び語り始めた。

「実は、オーランが助けたかったのはあなたの友人が救おうとした少女なのです。あの時、少女はかばおうとした少年とトラックに撥ねられ亡くなるはずでした。しかし、オーランはそうならないようにトラックを左にカーブさせることで、それを回避しました。そのため、あなたが巻き込まれ、少女とあなたの友人は助かったのです。」

「ちょっとまった。んじゃあ、あの時にトラックが曲がったのはオランダとかいう天使の仕業なのか??」

もし、そうなら天使だろうと何だろうと殺してやろうと思った……。

「そうです。トラックは曲がったというより曲げられたのです。そのため、100km/h以上のスピードで走っていたのにも関わらず横転せずに曲がる事が出来たのです。」

「そうか……。じゃあ、俺が死んだのはイレギュラーなことだったのか。」

「そうなりますね……。理解が早くて助かります。あっライコいかがでしたか?」

ミカエルが語ろうとした瞬間、扉の中からライコが現れた。

「ミカエル様の予想どおりでした。」

「何がだ?」

気になって俺が聞いたが、それには返事が無かった。

「仮説が、結論に変わったわ。あなたが死んだのは先ほどの理由で間違い無いけれど、地獄に言った理由は手違いだからよ。」

「はっ?いくら客観的に思えたといっても、想像を絶するような痛みで発狂しそうになったのが手違いだって!!」

地獄での日々を思い出しながらいつの間にか俺は叫んでいた。

「言葉が足りなかったわね。貴方が地獄で『死の眠り』から覚めたのは、本来あなたは地獄に行く人間じゃなかったからよ。」

「わかりやすく言え。」

「そうね。貴方がいたのは、貴方を撥ねたトラックの運転手が行くはずだった地獄なの。実は、トラックの運転手は少女を撥ねた後、その場から猛スピードで逃走したの。でもね、トラックのタイヤの隙間に少女の身体の一部が挟まっていたため、それが原因スリップして壁に突っ込んで運転手も死ぬはずだったのです。その上、その運転手は連続婦女暴行犯だったので…。」

「だから？」

「その運転手自体がひき逃げ以外にも多くの罪を犯していたので、それを償うために地獄へ送られるはずだったのに、オーランのせいで生き残ってしまった。だから、貴方が代わりに地獄に落ちたの。『死の眠り』で見た映像に違和感は無かったかしら？地獄で見せられる映像は自分がやってしまった罪を何倍もの痛みと共に本人に体験させるものだから…。」

そこで、俺は気がついた。地獄で見せられていた映像と自分の見た映像での違和感。その正体はトラックの不自然な動きと、俺の視線だ。実際の俺は歩道を歩いていたが、地獄での映像の中の俺は横断歩道を渡るういた。

つまり、俺の視線は少女のものだったのだ。トラックの運転手が殺したはずの少女の視線なのだ。

理解していくうちに腸が煮えくりかえりそうになってきた。

「つまり、あれか？俺は本当、天界に行くはずだったのに、地獄に落ちたってわけか？」

「ええ…そういうことになるわね。だけど、あなたが地獄で『死の眠り』から目覚められたのは不幸中の幸いと言えるわね。」

そこで、カチンつときた。

「不幸中の幸いだと？あんなものを永遠と思えるくらい何百回いや何千回も見せられて、幸いだと！！？？ふざけんなよ！俺の命返せよ。ってか、そのオーランって奴はどこだよ！！そいつこそ、地獄に落とせアホ！俺だって、まだやりたいことは色々あったのに、なんだよこの仕打ちは……………」

俺が怒り狂うのを見て、ミカエルとライコ完全に俯いてしまった。

「…返す言葉が無いわ。いくら大天使とはいえ、貴方を元の世界に戻すことは出来ない。そもそも、貴方が死んでから地球上では、すでに13年ほど月日が経ってしまったし……。そして、オーランはすでに禁忌を犯したことで砂となり消えてしまったわ。」

しばらく、椅子に座ったまま誰も口を開かなかった。

「…んで。俺はこれからどうなる？できれば今度こそ天界で、少しは安らいだ生活をさせてくれ。」

そこで、ライコとミカエルがさらに気まずそうな顔をした。

「実は…あなたは一度地獄に落ちたせいで天界には、住むことはおろか行くことすら出来ないの。。だから、本来ならこの話も天界ですれば良いのだけど、この境界と呼ばれる空間でしているの…。」

再び、沈黙。

「なら、また俺は地獄か…。心底腐ってんなこの世界は!!」

「…本当にすみません。貴方は今回の件で、完全な被害者なの。すべて私たち天界。いや、天使に責任があるのだから…。それなのにひどい仕打ちばかり受けさせてしまつて…。でも地獄に行くことはないわ。償いになるかわからないけど、貴方に新たな生き方を用意したいの。」

「新たな生き方?」

選択肢は無いと思つていたのだが、他に選択肢があるようだ。あまり、期待はしていないが地獄よりはマシだろう。

「あなたが生きていたのとは別次元、異空間に存在する世界で生きてみない?」

「さつき、生き返らせるのは無理だとか言つてなかったか?」  
ミカエルの言葉を思い出しながら言つてみる。

「地球にはね、しかし他の次元に貴方を飛ばすことは可能よ。ただし、戻ってくることはできないわ。どうかしら?」

少し考えてみるが、地獄よりはどう考えてもマシだろう。

「いい考えかもしれないが、その世界は一体どんな世界なんだ？」

「魔法や魔物などが存在する世界よ。地球と文化や生活様式は似ているところがあるようだが、微妙に異なっているわ。」

「ファンタジーだな…。」

「そうね。私たちも奇術という魔法を使っていますが、その世界のものとは異なりますね。」

少し、ミカエルが微笑みながら答える。

「しかし、俺には魔法の才能なんてないからなあ…。」

「わかりませんよ…。地球でも、魔法を行使することは可能ですが、誰も気づいていないだけですから。」

「なんだって!？」

そりゃ驚くさ、意外と身近に魔法が存在しているだから…。

「まあ、その話は置いて。ちょっと確認させてもらいます。」  
ミカエルが音も無く近づいてきて俺の額に手を当てる。

「…これは…さすがに、予想外です…。」

「どうかしたのか？」

「貴方は、魔力は確かに持っています。しかし、性質が…。」



「何だっけ言うんだ？」

「『死の眠り』から覚めたことにより、地獄の魔法である邪法。すなわち地獄の業火を意味する、闇と炎属性が覚醒したようです。」

「そうか。闇と炎か。なんか、いいな！」

先ほどの沈み具合から一変して、ちよつとテンション上がった。これから、異世界に行くこと加え、自分の中にも魔法の才能があったのだから。

「そのようですね。これなら、貴方の真紅の瞳も説明が付きます。魔法については、向こうに着いてから学んでください。私たちの奇術は天使専用なので、貴方には使いこなせませんので。」

「そうか。わかった。だが、俺の瞳は茶色だぞ？真紅なんて人間としてありえないだろう。」

俺がそう言うと、音も無くライコが俺に手鏡を渡してきた。そこに写っていたのは自分の顔であって、自分の顔ではなかった。

「なんの冗談だこれは…。」

驚くのも無理は無い。

真紅の瞳に、髪は真つ黒。顔立ちは童顔から、少々大人びたものへと変わっていたのだから。

「『死の眠り』の影響なのでしょう。説明は付きませんが…。」

「そろそろ出発してはどうでしょうか？」  
ライコの提案にうなずき

「そうね…」

「ちょっと待ってくれ！いくら異世界でも言葉も魔法も知らないんじゃないぞ！」

急に不安になってきた。

「わかっています。ですから私から贈り物を…」

そっいいながらミカエルが俺の額に軽く口づけした。

「はい。おしまいです。貴方の身体能力を向上しておきました。そして、言語や文字も読めるようにしておきましたので困ることは無いと思います。」

「おお。ありがとうな。」

「最後に…。本当に申し訳ありませんでした。こんな形で完全に償えるとは思いますが、新たな世界での生活を楽しんでいただければ、と思います。」

そっいって、深く頭を下げた。

「もういいよ。確かに、地獄では発狂しかけたけど。途中で違和感にも気づけたし、昔からの憧れの異世界にいけるならそれだけでうれしいよ。」

「そっいってもらえれば私たちも多少気が楽になります。では、お別れです。もう会うことは無いのが少々寂しいですが、人生を楽しんでください。」

「ああ、そっするよ！じゃあな！！」

「はい。さようなら」

その言葉とともに俺の意識は途切れた。

\*\*\*

「行きましたね。」

「…にしても、闇と炎ですか…なかなか面白いものを持っているようですネ。」

「面白いもの？そんなレベルじゃないわ。彼のは、地獄の業火そのものを吸収してしまったようなの…。」

「つといますと?」

「私が彼の魔力や質を調べようとしたら、中から黒い炎が伸びてきて追い払われたわ…。相等危険な代物よ。」

「…異世界などに送ってよかったのですか??」  
「ちよつとあわてたライコが聞いてくる。」

「まあ、彼なら大丈夫でしょう。異世界で何をするのが少々気になりますか…。」

「そうですね…」

そんなことを彼らが話していることなど知らずに俺の意識は深く深く沈んでいった。

## 第2話 境界（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします！！

### 第3話 飛ばされた場所（前書き）

3話です。

今回から、異世界に入ります。

では、どうぞ！

### 第3話 飛ばされた場所

トンネルを抜けるとそこは一面、銀世界でした。

ミカエル達に送られ、一瞬視界が真っ暗になったが、気が付くと俺は森の広場のようなところにいた。

「着いたみたいだな…」

ミカエルの話のとおりなら、ここは異世界だ。  
確認する方法が無いので一応、頭で納得しておく。

「まずは、状況確認だな…」

とりあえず自分の格好を確認すると、黒いコートに黒いカットシャツ、そして、黒のジーンズと黒づくしだ…。どうしてこういう格好なのかはわからないが質はとても良いもののようだ。黒づくめのことを除いては…。

「これ…日本なら完全に不審者だなw」

半分呆れながら、状況確認を続ける。

「ここは、どつかの森の中らしいな…。まあ、異世界のテンプレだね…」

前の世界で読んだ、異世界系のマンガを思い出しながらそんなことを思う…。

「後は、魔法だな」

そう。これが一番肝心なことだ。森の中に一人ぼっち。その上、武器も無い。

こんな状況で魔法やら何やらが使えないことは、死につながる確率が非常に高いのだ。

「とりあえず。燃えろ!!」

ミカエルに言われて炎と闇の属性は使えるらしいので、そこを試してみる。

しかし…

「現実には甘くないな…」

あたりまえだが、何も起こらない。  
日本なら100%イタい人だ。

「なら、ブリジンガー!! ファイアー! ファイラ!」

いろんな映画やアニメで使われていたものを叫んでみる。

しかし…

「結果は同じかよ…」

正直、誰かに教えてもらわないと無理そうだ。

そこへ…

狼が現れた。

「へ？」

さっぱり状況が掴めない。

しかし、狼は舌を出して攻撃体勢だ。

「あ、そういうことか…」

森の中に、餌がいるらしく匂いがしてきました。  
場所の特定に時間が掛かっているときに、何やら声が聞こえてきました。

その声を頼りに僕たちはやってきたのです。

勝手に狼の心の中を想像してみた。

「OK。絶体絶命のピンチってわけか…」

目の前の狼×3は、動物園にいる狼より一回り大きい上、頭からヤギのような角が生えていた。

「いかにも異世界って感じだな…。では、逃げますか！」

魔法も武器も無い、丸裸同然の俺に選べる道はひとつ。  
逃げることだ。

走った。

とにかく走った。

木の隙間を縫うように、時には木の上まで飛び上がり。

走って、飛んで、逃げた。

そして…ついに森を抜けることが出来た。



「ふう。なんとか撒いたか…」

後ろの森を振り返り、一応確認する。

「ってか、身体能力上がりすぎだろ！」

確かに、ミカエルは身体能力を上げるとか言っていたけど…狼よりも速く走り、木々を飛び越えてる時点で人間じゃない。

そもそも、あの速度で走りながら迫ってくる木の位置をすべて判断して避けるなんて、超人と呼ばれる存在だ。

「まあ、おかげで村つばいところに出たけどな…」

そう、目の前にはいかにも村って感じの集落があるのだ。

村を囲うように木で出来た障壁があり、物見やぐらのようなものも立っている。

そして、入り口に兵士つばい格好の人間が立っていた。

「…とりあえず行ってみるか」

俺は、入り口の門に向かって歩き出した。

「…何者だ。貴様」

「身分を証明できるものを出せ」

兵士っぽい人。否、厳つい兵士が俺に剣を向けながら聞いてくる。

「しがない旅人さ……。仲間と共に旅をしていたのだが、先ほど狼のようなものに襲われて……」

兵士2人が顔を見合わせ、

「狼とはウォーウルフのことか？」

「名前はわからないが、角が渦のように巻いている狼だったな。」

「ああ、そいつだ。ウォーウルフは、ランクCの魔物だ。なんといつても、牙に毒があるからな……。しかもこの森のウォーウルフは群つてるようだから、ただの旅人には対処できないだろうな。……んで、仲間と荷物は……？」

俺は少し悲しそうな表情をして

「仲間は死んだ……。荷物は、その時に置いてきてしまった。」

「……そうか。悪いことを聞いたな。ウォーウルフに関しては後日、遠征帰りの軍が討伐してくれるそうだから、もしかしたら荷物を取り返してくれるかもしれないぞ。まだ若いのに大変な目にあったのだな。とりあえず、彼らがウォーウルフを討伐するまではこの村に滞在するといい。」

急に態度が変わった。どうやら同情してくれたようだ。

……まあ、これは演技派な俺の大嘘だがな（笑）

「それは、助かる！……んで悪いんだが、すぐに金を稼げる場所とかあったら教えてもらえないか？　今、一文無しだから今日の食事も宿が危ういのだが……」

「…早急に稼げる場所は、この村には無いが…。兵舎に来たらどうだ？ まあ、兵士って言っても村の警備をするだけの物で人数も12人しかないがな！」

「隊長。村長の許可を取らなくていいのですか？」

「それは、事後申請でいいだろう。何、ウォーウルフに襲われた者を村から追いだす理由もないだろう。」

「しかし、彼は黒髪なので村の者が…。」

「構わない。俺の責任で管理すると言っておけ。さて。どうする？ 若造よ」

「よそ者を入れて、いいのか？」

若造。という言葉にピクツとしたが、スルーすることにした。

「構わない。俺もまだ、未熟者だった頃ウォーウルフに仲間を殺された。お前の気持ちも痛いほど良くわかる…。だから、そんな奴を放っておくわけにはいかないだろう。」

…ヤバイ。メチャクチャ罪悪感があるわ。。。

「本当に助かる…。何か俺にも出来ることは無いか??」

さすがに嘘付いた上、ただで泊まるわけにはいかないしな…。

「そうだなあ…出来れば、俺と手合わせしてもらえないだろうか？」

「手合わせ？」

「ああ。こんな辺鄙な村じゃ自分の実力がよくわからないから、お前の見た目的にかなり遠くから来た者のようだからな。たまには外の者と打ち合ってみたいのだよ。それに、剣を交えれば自然と相手のことがわかるもんだしな」

「うーん。身の潔白が証明できるなら、喜んで引き受けよう」

正直、俺も身体強化がどこまで効いているのか試してみたかったので丁度よかった。

「じゃあ、早速出悪いが村の広場に行くぞ」

「広場？」

「あいにく、鍛錬場は無いのでな…」

そう言いながら、男は苦笑いをした。

「いや。全然、構わないよ。って、いまさらだけど自己紹介しておくよ。俺の名前は龍也。龍也・赤羽だ」

「タツヤ・アカバネ？珍しい名前だな。俺は、オリクだ。手合わせと言っても本気でかかってきてくれよ？」

村自体があまりい大きくないので広場にはすぐに着いた。

2人が少し離れて立つ。

「そちらこそ、退屈させないでくれよ??」

なんか、弱みを見せたくなかったので強がってみた。。

「言っね…若造！」

「おっさんこそ！」

「まあ、いい。手合わせのルールはどちらかが負けを認めるまでだ。武器はこの木剣を使う。」

そういつて、俺のほうに1本の剣を投げてくる。

材質は木っばいが木刀よりも太い。  
手にとってみたが、とても軽い。

ぶんぶん振り回してみて、馴染ませてみた。

「用意はいいか？」

俺たちの間に立っている兵士が聞いてくる。

「ああ」

「いつでもいいぜ？」

「では、試合開始！」

サツと。両者がいつせいに地面を蹴る。

ガツツ。ガツツ。

木剣がぶつかり合う鈍い音が響く。

オリクは、大柄な身体にも関わらず機敏な動きをして、俺の隙を突こうとする。

しかし、俺には剣がスローモーションで動いてるように見えるので、紙一重で交わして、オリクの攻撃の際に出来た隙を突く。

サツと。攻撃を予知したのかオリクが後ろに下がったため俺の剣は空を切る。

そこに、追い討ちを掛けるように俺が飛び掛るがオリクが身体を反らせ、それを避ける。

俺が着地した瞬間を狙うかのように、オリクが下から上に切り上げて来た。

しかし、人間離れたした動体視力を生かし、オリクの剣先にわずかに触れ軌道を反らせる。

一瞬、驚いた表情をしたオリクだったが反らされた軌道のまま、回転切りを仕掛けてきた。

なんとか、それを交わしつつ再び、剣が交差する。

そこで、オリクが俺に蹴りをいれバランスを崩したところにすかさず切りかかってきた。

しかし、側転の要領でそれを避けて再び距離を取る。

「やるな…若造。剣さばきは素人っぽいが、身体の動かし方には俺では、ついていけそうにないな」

「そりゃどうも！おっさんこそ、紙一重で交わしやがって！」

「若造に負けるわけにはいかなからな！そら、行くぞ！！」

サツと。

両者一斉に飛び出し、剣を交える。

しかし、さっきの教訓もいかして交えている最中に、手首と身体を

捻るようにし、オリクの後ろに立つ。

「もらった!!」

俺はそのまま1回転しながらオリクの背中に切りかかった。

ゴツッ。

鈍い音と共に後ろでオリクが崩れ落ちた。

「よし。勝った…うああ!!」

オリクを完全に倒したと思って背を向けたのがいけなかった。  
後ろから、思いつきり木剣を食らった。

よろめきながら何とか俺は、立ち上がる。

「ほう。その打撃から立ち上がるとはな。」

「卑怯だぞ、おっさん!!」

「卑怯?この試合の勝敗条件は相手が負けを認めるまでだと言った  
はずだが?」

「つく」

完全に俺が甘かった。

「まあ、お前さんの打撃もなかなかだったよ。この鎧が無ければ肋骨を2・3本折られていたかもしれないな」

そう。おっさんは鎧を纏っているのに対し、俺はただのコートを羽織っているだけなのだ。

「仕切りなおすぞ！」

「いくらでもかかってこい」

サッ…

再び二人の打ち合いが始まった。

\*\*\*

…結局、両方とも負けず嫌いなこともあり約6時間撃ち合っていた。

しかし、そこで腹のほうに限界になり、いつの間にか2人とも剣を地面に置いていた。

「腹減った…」

「同感だ…」

審判をしていた兵士の姿は見当たらず、先に兵舎に戻ったようだ。

「約束どおり、兵舎で飯を食わしてやる。いくぞー!!」

「ああ、飯だあー!!!」

2人はそのまま兵舎に飛び込み、食堂のところにいた女性に声を掛ける。



「アンナ。俺とこいつに、いつものやつ。量は特盛で！」

「はいはい。あんたもいい年なんだから少しは落ち着きなさい」

そっぴいながら、アンナと呼ばれた女性が俺とオリクにお盆を差し出す。

お盆の上には、牛丼が特盛で置かれていた。

「ありがとう。アンナさん！！」

「お、新入りか…ってもう食べてるし。。」

アンナさんにお盆を受け取ると直ぐに俺とオリクは近くのテーブルに着き、猛スピードで牛丼を食べ始めたのだった。

「…おかわり！！」

「おかわり下さい！！」

2人そろって、アンナさんに丼を差し出す。

「呆れるくらいの食欲ね…。はい、どうぞ！！んで、あんた名前は…って、もう食べてるし！！」

またしてもアンナさんから丼を直ぐにテーブルに着き口の中に牛丼を流し込むのであった。

そして、計5杯の牛丼を食べた俺たちはほぼ同時に、ゴソツと丼をテーブルに置いた。

「いやあ。食った、食った。」

「ああ。満足だ。アンナさんの料理はうまいなあ」

「あら、褒めてくれるの？ありがとだね。うちの主人はほとんど褒めてくれないんだから」

「そ、そんなことないだろう！？」

オリクさんがやけに慌てだした。

…まさか。

「オリクさんとアンナさんって夫婦なんですか？」

「あら、言ってなかったの？そうよ、うちの主人がお世話になったみたいね。窓からしばらく広場の様子を見ていたんだけ…あなた、若いのに随分な使い手ね」

「そうでもありませんよ。剣術なんて素人同然だし…」

「確かに、剣術はもつと鍛錬が必要なようだね。だが、身体強化の魔法は違和感を全く感じない程の一体感を持っているのだから誇っていいと思うぞ？」

「え、身体強化の魔法ってなんですか？」

「何を言っただお前？ 戦いのときに俺も、お前も使っていただろっ？」

「え？ そうなんですか！」「」

「まさか…お前、身体強化の魔法使ってないのか？？」

「使っていないというか…魔法そのものが良くわからないので…。」

「…そういうことか。確かに、魔法の知識を得るのには金が掛かるからな…。しょうがないだろう…。」

なんか、勘違いされている気がするのだが気のせいだろう…。

「明日の朝、ここで簡単に説明してやるから、それまで待っていてくれ。さすがに今日は疲れた…。」

「頼みます…。」

フラフラと2階へ上がっていったオリクさん。

「すいません。俺も休みます…。」

「あーそうなの？残念ね…じゃあ、明日ゆっくり話しましょうね。」

あ、貴方の事情はさっきオリクから聞いたわ。2階の奥から2番目の部屋を使ってちょうだい」

「ご親切にありがとうございます」

そうお礼を言って、俺も2階に上がっていった。

言われたとおりの部屋に入ると、中にホテルにあるのより質素なベツトが見えた。

俺はそのまま吸いこまれるようにベツトに寝転び、戸締りもしないまま、夢の世界に落ちていった。。。

### 第3話 飛ばされた場所（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想ありましたらよろしく願います！

## 第4話 読書（前書き）

今回は、魔法についての解説をいれてみました。  
では、どうぞ^^

## 第4話 読書

「ふわぁぁあ」

盛大な欠伸と共に俺は、ベットから起き上がる。

昨日、倒れこむように寝たせいか、首の辺りがやたらと痛い。  
首をパキパキしながら、水道に向かう。

驚いたことに、この世界では水道が存在する。

つといても水の魔法を使っている魔道具という物らしいが…。

水道から出る水で顔を洗い、寝癖を直した。

そして、そのまま1階の昨日食事をした食堂に向かった。

…が、なにやら慌しい雰囲気だ。

「おい！！握り飯足りないぞ、後30個作ってくれ！！」

「はい！貴方、裏の納屋から野菜の入った木箱持ってきて！！」

ちょうど、オリクさんを見かけたので話しかけてみた。

「おはよう。どうしたんだ？この騒ぎ。」

「おお、タツヤか。おはよう。いや、今日の夕方頃には村に遠征帰りとはいえ王国軍が来るから宴の用意をしなくてはならなくてな…。」

「そうなのか。何か、手伝えることはあるか？」

アンナさんが女性に何やら命令しているのを見ながら聞いてみる。

「そうだな、アンナの手伝いをやってくれ。俺は、村長の所にいかなくてはいけないのだな。」

「了解。アンナさんなんか手伝うことある??」

「あん? タツヤも手伝ってくれるのかい、んじゃあその野菜を洗っておいで!」

そっぴいなから、木箱に入っている大量の野菜を指差す。

「わかりました...。」

1箱まるまる渡されてさすがに困惑したがほかの人も忙しそうだったので、我慢して洗うことにした。

箱の中身は日本で見たことのある野菜以外にも、紫色のブロッコリーのようなものまであった。

それを1つ1つ取り出して、丁寧に洗っていく。

俺が洗った野菜は10分に1度、ほかの仕事を担当している女性に取りに行く。

そして、1箱やっと終わったと思ったら、いつの間にかみおうもう1箱追加されていた...。

しかし、俺はそれに文句を言うわけでもなく淡々と野菜を洗っている。

なんとか一通り作業が終わるとオリクさんがこっちを見ながら手招きしていた。

「なんの用ですか?」

「アンナが作業終わったら休んでいいとき。」  
「そういいながら、昨日と同じ席に座る。」

「いいのか？」

「構わないだろう。んで、悪いんだが身体強化の魔法について教える約束、この状況じゃ守れそうにないからこれを貸しておく。」  
「そういつて俺に1冊の本を分厚い本を渡してきた。」

「俺も金持ちつてわけじゃなかったし、実力も平均的だったから王立の学校には行けなかったが、私立の騎士学校には通えたんでな。まあ、これはその教科書だ。」

「わざわざ。ありがとうな！」

「なに、もう20年近く前の話だからな…。まあ、魔法に関しては大して変わって無いから大丈夫だろう。」

「本当に助かる！」

パラパラ本をめくりながらそう、答える。  
結構詳しく書いてあるようだ。

「まあ、何かわからないことがあったら聞いてくれ！直接話せなくて悪い…。これから、他の兵士と打ち合わせをしないといけないけどな…。」

「あんたも忙しそうだな。んじゃ、俺は早速これを読ましてもらおうよ。」



「ああ、そうしてくれて構わない。軍が着たら呼びにいくよ。生で見たいだろう?」

「軍か。。確かに見てみたいな。じゃあ、来たら呼んでくれ。」

「おう!」

そう言つて、オリクさんは兵舎から出て行つた。

俺は、昼飯を軽めに食べて、2階に戻つた。

ベットの上に座り、本を広げる。

「さて、早速これを読みますか。」

俺は古びた表紙をゆつくりめくつた。

\*\*\*

『改定魔法新書』      著者 ジェームズ・ノア

第1章    ～魔法とは?～

魔法とは己の魔力を消費し、使用する術式の総称である。

魔法は神から授けられた能力という見解が一般的で、未だに解明されていない部分が多く存在する。

魔法は自身の身体能力を強化するものを代表とした内面を対象とした魔法と攻撃魔法をはじめとする外部を対象とした魔法が存在する。そして、これらは使用する魔力によって次のように段階分けされる。

神聖魔法  
古代魔法  
精霊魔法  
上級魔法  
中級魔法  
下級魔法

この6つだ。

それぞれの段階によって威力や規模も全く異なる。

また、性質や効果によっても変わってくる。

もちろん、上に行けばいくほど威力や規模は大きくなり莫大な被害を与えることができる。

30年前、レオン・アスタークが古代魔法を扱い、王国から独立を果たしたのは有名な話だ。

魔法はそれぞれの段階のほかに属性が存在する。

属性とは、魔法を使用する際に必要な相性のことである。

人間は、1種類の属性しか使用することは出来ず、それらは身体的特徴に現れる。

身体的特徴に現れないこともあるが、たいていはそこから属性を判断することが可能である。

火 水 雷 風 地

氷

これらは、基本6属性と呼ばれるものだ。  
他には、

闇 光

の特殊2属性

錬金

聖歌

の妖精2属性が存在する。

人間は基本6属性のうちどれかひとつに属しており、その属性の魔法のみ行使することができる。

例外としては、王国直系家系は光の属性を使用することが出来る。

光に関しては、詳細なことはわかっていないが水と同じく治癒能力があると考えられている。

闇は全てが謎に包まれており、魔物が使用するのが闇属性ではないかというのが一般的な考え方だ。

妖精2属性はエルフの歌魔法。ドワーフの創造魔法。の2種類が含まれている。

第2章└魔法の使用について┘

魔法は前章でも触れたとおり、魔力を使用することによって発動します。

そのため、まず自分の中に存在する魔力を認識しなければなりません。

魔力の認識は人によってやり方は異なりますが、ここでは一般的な方法を挙げておきます。

自分の胸に手を置き、目をつぶります。

心臓の音に集中しつつ、身体の中に精神を広げていくようなイメージと共に自分の中にある、貯蔵庫のような部分を探します。

人によって、色や量もことなりますが自分の中にたまっている物を探し当てれば、それが魔力です。

そして、物体の色が属性を指します。

属性の色は下の表を参考にしてください。

火	赤色
水	紺色
雷	黄色
風	緑色
地	茶色
氷	水色

魔力・属性を認識することが出来るまでは、これを繰り返してください。

## 間章 く属性の詳細解説く

より実践的な魔法の使用の前に、各属性の特徴を捉えておく必要がある。

### 火属性

炎を扱う属性で、広範囲攻撃に特化している。  
広範囲にわたる攻撃をすることが出来るが、ピンポイント攻撃には向いていない。

また、制御が難しい属性で未熟なものが使つと鎮火することが出来ず、2次被害につながることもある。

### 水属性

水を扱う属性で、治癒や防御を得意とする。

攻撃魔法も存在するが、水が無い場所では不利になることが多く、空気中の水分を使用した防御結界や治癒能力を促進するなどのサポート系の術が多い。

先にも述べたとおり、砂漠や火山などの湿度が低い地域や水分の無い場所では本来の力を発揮することが出来ない。

### 雷属性

雷を扱う属性で、ピンポイント攻撃に特化している。

スピードと命中率では、トップクラスである。しかし、術に伴う轟音により位置を特定されやすい。

相手が少人数なら問題は無いが、大人数となると不利になる。近くに水分があると仲間に帯電する事があるので使用には注意が必要。

風属性

風を扱う属性で、広範囲攻撃に特化している。広範囲にわたるカマイタチによる攻撃や、仲間への伝達などをつかさどることが多い。

風魔法は莫大な魔力を使用するため、連射することが難しいので使用の際に魔力残量に注意が必要。

土魔法

土を扱う属性で、身体強化に特化している。

己に魔法をかけ、身体能力を通常の数倍にした状態での戦闘を可能にすることができる。

しかし、一歩間違えると違う術式をかけてしまう場合があるので練習を積んだ上で自分にかけるひつようがある。

氷属性

氷を扱う属性で、連携を得意とする、

氷魔法単体でも、かなりの破壊力を持つが他の魔術との連携プレーによってさらなる大きなダメージを与える出来る。

しかし、氷は水属性と同じく空気中の水分を使用するので、砂漠や火山では使用できない。

### 第3章 魔法の実践的使用法

魔法を使用する際にもっとも必要になるものはイメージ力である。そのため、魔法を始めた直後は決して発動中に別のことを考えないように。

魔法の発動は大きく3つのステップに分けられる。

## STEP・1

魔法の発動の仕組みは、自分で技の構造・機能・性質を定めるところから始まる。

これらの3つの要素をより具体的にイメージすることによって、発動した魔法の効果も増加する。

このとき、より具体的かつ明確なイメージを構造することで正確性や威力に大きな影響を与える。

## STEP・2

その術式を構成するのに必要な魔力をイメージして、先ほど構築したイメージに合体させる。

魔力は、下級魔法、中級魔法と段階ごとにだいたいの量が決まっているのでその量を経験的に身に着けていく必要があります。

## STEP・3

技名ないしは、その術に関連する言葉に寄せ、今までイメージだったものを具現化し発動する。

言葉、通称『言霊』とよばれますが本人が最も技に関連すると思うものに乗せることが大切です。

これが、魔法の発動の仕組みである。

しかし、実際はイメージをすべて口に出すことによって、より明確かつ具体的な技を構築するのが一般的である。

上に述べたのはあくまで、発動の仕組みであるの全ての人間が出来るとは限らない方法である。

これらの流れを一瞬で出来てこそ魔術師ないしは魔法使いを名乗ることができるのである。

例) 下級魔法 ファイアーボール

1、イメージは炎の玉。大きさはこぶし一つ分。目の前の的に向か

つて一直線に飛んでいき、着弾とともに的が燃え上がる。

2、魔力は自分の中のこれくらい。後、100発ほど撃てる量。

3、「炎よ弾となり、的を撃ちぬけ！ファイアーボール！」

これは、著者である私が初めてイメージした際のものなので参考にしてください。

#### 第4章 ヽ魔獣契約についてヽ

この章では召還魔法の1種である。魔獣契約について解説する…。

\*\*\*

そこで、俺は本をバタッと閉じた。

やはり、本だけでは中々わかりにくいところがある。

「なんだっけ？あ、魔力のイメージね。」

とりあえず、認識できるかやってみることにした。

思ったら即実践が、俺のポリシーだ。

イメージする。

心臓の上に手を置き、身体の内部に入っていくようなイメージ。  
ドクッドクッドク…。

心臓が動いているということに少々喜びを感じつつ、身体の中を探し回るイメージ。

心臓。血管。肺。血管。肝臓。

イメージとはいえ徐々に鮮明に探していく…。



つと今までに何も感じたことの無い部分に、『何か』が存在していた。

「これだ……」

なぜかはわからないが自然とその『何か』を認識していた。

意外とあっさり見つかったそれは色は赤色。否。どす黒い赤色。

コーヒーにミルクを混ぜたように黒色の物と赤色の物が渦のようにグルグルと動いている。

その様子をしばらくじっと見ていた。

パツと目を見開きながら今、見たものを思い出す。

「これが魔力か。」

一度認識してしまったせいか、今は体調がわかるように魔力も感じることが出来る。

ミカエルも言っていたが俺は火属性と闇属性を持っているらしい。

本をくまなく探してみたが、闇属性については一切が謎に包まれているのでわからなかったが火属性については大体理解した。

「つまり、あれか。魔法を使うには、原型となる構造・機能・性質に魔力を加えて、言霊と共に放出すればいいんだな……。だけど……」

俺は、考え事をするときは声に出すので、独り言にしてはぶつぶつと色々しゃべっている。

「一回、誰かにやってもらったほうがいいな。」

『百聞は一見にしかず』。先人の知恵はたぶん役に立つだろう。

そう思いながらベツトの上に本を置き、1階に下りていった。

「おう、タツヤ！ちょうど、呼びに行こうとしていたところだ。王国軍がもうすぐ到着するそうだ。急いで来い！」  
階段の途中でオリクさんに会った

「わかった。案内してくれ！」

約束だったし、この世界の軍というのは気になった。それにもしかしたら魔法を使うかもしれないと期待してオリクさんについていった。

連れてこられたのは、昨日俺たちが打ち合った広場だった。

「あれ？門じゃないのか？」

「ああ。まあ、やってくればわかるさ。」

「え？…」

徐々に地面が黒くなり

バサッバサッバサ…

何かの羽音と共に、空から馬のようなものがゆっくり降りてきた。

パツと上を見上げた俺は啞然とした。

「なんだ、こりゃ！？」

そう、空から降りてきたのは羽が生えた馬。天馬と称されるペガサスだった。

しかし…

「これって…ペガサスか？」

「おお。見たことあったのか？さすが旅人だな。」  
オリクさんが笑いながら答えるが…

「いや…毛の色おかしくないか？？」

そう、このペガサスは毛の色が普通の馬と同じ茶色なのだ。まあ、1匹だけやたら赤いのもいるが…

「色？おかしくないだろう。」

「いやだつて。ペガサスって言ったら白じゃん！」

「ああ、皇女殿下のペガサスのことを言っていたのか。ペガサスは普通は茶色だが、あの方のペガサスのみが王国で白色をしてるんだよ。」

ちなみに王は金色の毛並だそうだ…。

「そうなのか…。」

なんか期待を裏切られたような微妙な気分になった。

その時、地面に降り立ったペガサスから一人の騎士が降りてきた。

「救援の報を受け、やって参りました。村長殿はどちらでしょうか？」

いかにも騎士という格好の人から聞こえたのはきれいな女の人の声だった。

「わしじゃ。」

人垣の真ん中あたりにいた老人が、一歩前に出る。

「お初にお目にかかります、王国航空部隊第2番隊隊長を勤めさせていただいているニーナ・ヴィクトリアです。」

「お噂はかねがね聞いております。長旅でお疲れでしょう。ささやかながら食事の準備をさせていただいたので、こちらへどうぞ。」

「ご配慮、感謝します。皆の者、食事だ。感謝していただくように！」

「「「は！！」」」

そうして、5人の騎士が村長の住む館へと入っていった。

#### 第4話 読書（後書き）

いかがでしたか？

感想していただいた方、ありがとうございます。

これからも、ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 第5話 初めての魔法（前書き）

今回、初めて魔法が登場です。

では、どうぞ^^

## 第5話 初めての魔法

村長に連れられ、5人の騎士が館のなかに入っていくのをオリクさんと見送った俺は思い出したように口を開いた。

「あ、オリクさん。借りた本の魔法に関するところ大体読んだんだけどさ、今ひとつ実感わかないんだよ。実際に見せてもらえないか？」

「ん？まあ、しばらく騎士の方々も村長が相手をしているだろうし……いいだろう。見せてやろう。」

少し考え込むような動作をしたが快く引き受けてくれた。

「とりあえず、タツヤ自分の属性はわかったのか？？」

「ああ、たぶん火属性だ。」

「そうか。まあ、俺は地属性だから参考になるかはわからないぞ？それでもいいのか？」

「ああ、構わない。っというか頼む！」

「わかった。まあ、簡単なやつだな。」

そういつて、オリクさんは額に人差し指を当てた。

「土よ岩と成せ。ロック・ダモン！」

間一髪あけずにオリクさんから、昨日までは感じなかった魔力の流れを感じ、魔法が発動した。

そこにあつたのは、1 mほどの岩の塊。  
つといても、砂で出来ている岩のようだ。

「これは、何の魔法なんだ？」

「ロック・ダモン。まあ、地面に砂や土などを岩の塊に変化させ、それを飛ばすことで相手に攻撃する魔法だ。もともと、今は見せるためのだけの使用だから、飛んでもいくことは無く地面に置かれたままなのだが。」

「それが、イメージによる変化なのか？」  
先ほど見た本の中身を思い出しながら考える。

「まあ、そういうことだな。うまくイメージをしないと自分の守るべき存在を傷つけてしまうからな。魔法にはいつでも多大な注意が必要だから気をつける。」

「ああ。わかった。」

「とりあえずなんかやってみろ。火属性なら代表的なファイアーボールがいいだろう。的は…あそこの岩にぶつけて見ろ。」  
オリクさんが先ほど作成した岩を指差しながらそう言うて来た。

確か、ファイアーボールはあの本にも載っていた技だ。  
しかし、いざ魔法を使おうと思うと結構緊張する…。

「いくぞ。」

誰に言うわけでもなく、そう呟いてみる。

イメージする。



それは、拳くらいの炎の球。

炎が球体の表面を揺ら揺らと漂っている。

その球は弾丸のように一直線に、あの岩に向かっていくのだ。

イメージする。

炎の球を作るのに必要な魔力。

自分の中で蛇口をひねるように魔力を搾り出す。

そして、言霊に乗せる。

「炎よ。弾丸と成し、あの岩を打ち破れファイアーボール！」

その言葉と共に俺の手には拳大の炎の球が現れ、それが弾丸のような猛スピードで岩にぶつかり、岩が砕け散った。

ズガンという音と共に砕け散った岩の破片は、それぞれが炎に包ま燃えている。

「ほお。なかなか素質があるじゃないか。使ったのは初めてか？」

「ああ。なんか、イメージが掴めそうだからもう一度頼む。」

「おう。わかった。」

そういつてオリクさんはまた、岩を作成してくれた。

そして、俺がそれを壊す。

これを数回繰り返し返していくうちに、徐々にイメージする時間も短くなってきた。

\*\*\*

「では、詳しい話はこの村の警護を担当している。オリクという男から話しましょう。」

ささやかといいつつ中々豪勢な食事だった。

私を含めてた5人に出すにはいくらなんでも多すぎるのでは？という量だった。

その上、味もうまかったので文句の付けどころが無い。

「ああ。頼む。」

そう。我々がこの村に来たのはウォーウルフの討伐を任されたからである。

あまり、のんびりしている暇は無いので早速オリクという男のところへ向かうことにした。

「ファイアーボール！」

割と若い男の声が聞こえたかと思うと私たちから5mほどのところにあつた岩が炎の球にあたり、砕け散り燃え上がった。

「……な！」「……」

村長と部下が、驚いているようだが魔力の流れを感じていた私にとつてもは、たいしたことではなかった。

「大丈夫ですか！ニーナ隊長！！」

かなり、慌てた様子の新人隊員が私の元に向けより叫んできた。

「こんなことで、慌てるなみつともないだろう！な！！」

そっぴいながら岩がなくなったことによって目に入ってきた少年に目を奪われた。

\*\*\*

「ファイアーボール!!」

約1時間、オリクさんと特訓していたら、徐々に言霊を減らしていけるようになり、ついに技名だけで発動することができるようになった。

今回も岩が炎の球に当たって砕け散ったのだが…岩の後ろにちょうど人影が見えた。

「…なあオリクさん。あそこにいるのって、さっきこの村に来た騎士の方々じゃない…？そうだったら、かなりヤバいんじゃない…w」

「言うな…タツヤ。当たらなかったからよかったものの、俺らは騎士殿に手を上げたように認識されているかもしれないからな…。」

「オリク!!」

村長が真っ赤になりながらこちらに大股で歩いてきた。高齢さを感じさせない動きだった。

そして、村長が俺らのところに来た。

「何をやっておるか!! 客人に怪我をさせたらどうなるかわかっておるか!」

「申し訳ありません。村長。」

「謝ってすむ問題では無いぞ!! それに、お前…誰だ!!」  
俺の方に向き直った村長がものすごい剣幕で、俺に突っかってきた。

そんな俺に代わりオリクが助けてくれた。

「村長、昨日言った旅人のタツヤです。ウォーウルフを最後に見たのはきつと彼でしょうから役に立つだろうってことで…」

「そんなこと知るか！今すぐ、この村から出て行け！」

村長も相当頭にきているようだ。

そんな時

「まあまあ。それくらいにしてください。私たちには何も怪我もありませんし、魔法の練習中に勝手に近づいてしまったのですから。」

そう。王国からの騎士団の方々だ。

「いいのですか、ニーナ殿？」

急に村長も落ち着きを取り戻したようだ。

「ええ。それより、魔法を使ったのは貴方??」

そっぴいながら俺のほうに引き返った。

「ああ…そうです。」

さすがに敬語にしようと思う俺だった。

「あなた、魔法が使えるの？」

何やら随分驚いているようだ。

「先ほど、教えてもらいやつと1つの魔法だけ使える程度ですけど…一応、使えますね。」

「失礼ですが…あなた、レガビアンじゃないの??」

「レガビアン？何でしょうかそれ？」  
聴きなれない言葉を言われた。

「レガビアン。古代語で『黒髪の民』という意味よ。最近ではほとんど見かけないと言うけど…。レガビアンは魔法を使うことが出来ず、『古代文明の遺物』という物を使用するはずなんだけど…」

「俺は、レガビアンじゃありませんよ。。ただ、孤児として育ったので自信はありませんが…。」  
とりあえず、不自然にならない程度の嘘の経歴を作っておく。

「そう…。悪い事を聞いたわね。まあ、魔法を使える時点でレガビアンでは、無いでしょう。。けど…。」

「あのおゝ。ニーナ殿？」

話が脱線しているのに我慢できなくなったのか村長が口を開いた。

「ああ。すまない。オリク殿はあなたかな？？」

そういつてニーナ隊長はオリクさんに近づいた。

「ええ。先ほどは申し訳ありませんでした。」

「もう。そのことはもういいわ。それより、ウォーウルフの情報をお願い。」

そういいながら、ニーナ隊長はさつと髪をなでた。

「はい。最後に遭遇したのはこちらのタツヤなんですが、この村の

周囲にウォーウルフが度々現われています。しかも、現われる時は3〜6体の群れなのです。」

「ウォーウルフの群れですか…。こちらはペガサスで空中から魔法攻撃を仕掛けます。風属性なので、火事などの心配は無いでしょう。」

「空中からの攻撃なら、毒牙に噛まれる心配も角に突かれる心配も無いので討伐は容易だと思います。」

「それは、心強いですね！出発はいつごろに？」  
村長の目がキラキラしているように見えた。

「準備がありますので、2時間後に出発します。」

「では、頼みます。では、よろしくお願いします。」

「了解しました。皆の者、早速準備に掛かれ！」

「はっ！」「はっ！」

騎士たちが散り散りになり準備を始めた。

\*\*\*

騎士たちが討伐の準備を進めている中、ニーナ隊長が俺のところにもたやってきた。

「もし、よければなのだが…また、後で話をしないか？色々気になることがあつてな。」

「ええ。構いませんよ。」

「では、また後ほど。えっとお…」

何やら困った表情を浮かべているのを見てハッとして答えた。

「タツヤです。」

「ああ。では、タツヤまた後でな。」

そっぴいながら兵舎のほうに向かっていった。

残ったオリクさんと俺はしばらくボーっと突っ立っていたが、ハッとわれに返った。

「どうするか？魔法の練習を続けるか？」

「いや、さすがにやめておく。」

「だろうな…。それにしてもお前さん、あの隊長に気に入られたみたいだな。」

「そっかあ？」

「ああ。その証拠に討伐終わった後にも呼ばれたんだろ？」

「まあ…。な。黒髪が珍しかったんだろう。」

そっぴいながら自分の黒髪を撫でる。

「黒髪…。そのせいで今までつらい思いをしたんじゃないのか？あ、話さなくていいぞ。だが…レガビアンと言われるまで忘れていたよ。」

「そんなに、レガビアンっていうのは忌み嫌われていのか？」

「いや。嫌われていたというより、レガビアン自体が非常に友好的な部族であったことで一般的な人々からは好かれていたよ。しかし、レガビアンが持つ魔力を必要としない『古代の遺物』は大変希少価値が高かったため、何人もよからぬ事を企みながら近づいていくものがいた。そしてついに一部の貴族連中が大群を率いて、レガビアンが住む集落に攻め込み一方的な大虐殺を行ったのだよ。女、子供問わずな。」

少々気まずそうにオリクさんが説明してくれた。

「なるほどな…それでレガビアンはもういないのか？」

「正直なところわからない。しかし、昔のような友好的な思想はどこかに行ってしまったているのは事実だろう。元々この国でも黒い髪の子供が一般的な家庭で生まれることはあった。しかし、レガビアンの騒ぎや魔法の上達速度が遅いことを理由に捨てられることが多くてな…。」

俺が思っていた以上に事態は深刻なようだ。

「わかった。もう、この話は終わりにしよう。」

一方的に話をふっておいて、あれだが聞いていると腹が立って仕方が無かったのだ。

「ああ…そうだな。んじゃあ、飯にするか。」

そう言っただけ俺らはアンナさんのいる兵舎に向かった。



「…はいよ！いつものやつね！！」  
アンナさんにそう言われたのと同時にお盆の上に昨日の井が乗せられる。

「ありがとうございます！」

昨日ほどお腹は空いていなかったが、それでも魔法の練習をしていたせいかガツガツ食う俺らだった。

「先ほどの話で気を悪くしたなら謝るが。。」

「いや、べつにオリクさんが悪いわけじゃないし実際に起こってしまったことなのだから、いまさら何を言ってもしょうがないだろう」

「お前は、年の割に随分、大人びた考え方をするんだな。」

「まあ、育った環境上ね。。」

俺たちが食後のコーヒーを飲み終わったところに、オリクさんが立ち上がった。

「そろそろ、騎士団の方も出発するところだから広場にいくぞ。」  
そっぴいながら俺らは広場に向かった。

広場にはすでに人々が集まっており、数人の老人たちが騎士達のところに行き、「よろしくお願いします。」と泣きついていた。  
「彼らは、息子や娘がウォーウルフの被害を受けてな…。」

騎士たちに哀願している老人たちの顔には必死さが表れていた。

「これで、家族が報われればいいが…。」  
敵を討ったところで必ずしも人が幸せになるとは限らない。これが現実であることは、祖父から散々聞かされた。

「そうだな…。」

オリクさんも頷きながらその様子を見ていた。

「…これより、王国の騎士団のかたがたが我らの宿敵ウォールフの討伐に向かってくれるそうさ。拍手を持って送り出そう。」

村長の言葉に村人たちは、

「……「おおお!!」「……」

と叫び、割れんばかりの拍手の音を響かせた。

そして、それに答えるように5頭のペガサスが「ヒヒイーン」と鳴き、空へと旅立った。

## 第5話 初めての魔法（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想等ありましたらよろしく願います。

## 第6話 闇（前書き）

### 警告

今回の内容はかなりグロテスクな表現を含みます。  
苦手な方は見ないでください。

それでは、どうぞ

## 第6話 闇

ペガサスが空中をまるで山でも駆け上がるかのように、飛び立った。

村人たちの歓声につつまれ飛んでいく姿は例え白いペガサスじゃなくても神秘的だった。

徐々に解散し始めた村人達がいる中でオリクさんと村長が何やら話していた。

「これで、村は救われるなオリクよ。」

「そうですね…。しかし、あの森にいるのはウォーウルフだけではないので安心は出来ませんが。」

「そうじゃのう。さて、わしは館に戻るとしよう。警備のほうは頼んだぞ。」

「はい！」

村長も館に帰っていった。

「オリクさん。この後、どうするんだ？」

「俺は村の警備に行くが、お前も来るか？」

「いや…。ちょっと休むよ。今日はやたらと身体がダルいんだ。」

少しオリクさんが心配そうな顔をして

「大丈夫か？たぶん、初めて魔法を使って影響だろう。俺も最初の

ころはかなり辛かったからな…」

「そついうもんなのか？ とりあえず休ませてもらうよ。」

「ああ。そうしろ。今日は手伝ってもらったし、夕食になったらまた呼びに行くよ。」

「頼む。」

そついつて、俺達はその場で別れた。

オリクさんは門の方に、俺は兵舎に向かった。

兵舎の入り口でアンナさんにあつたので理由を簡単に説明し、自分にあてがわれた部屋に入る。

「大丈夫？」

と心配してくれていたのがとてもうれしく思った。

ベットに横になり、目を瞑るが…なかなか眠れない。

「こついうときに限ってなかなか眠れないもんだな…。」  
と独り言をつぶやきながらゴロゴロする。

すると、足に鈍い感触が広がった。

「い、いてええ!!」

がばつと起き上がり、足をみると。  
脛にオリクさんからもらった本の角が当たったようだ…。

完全に眠気が覚めてしまったので、本を開いてみた。

適当に開いた、そのページには様々な技名と効果が説明してあった。

\*\*\*

## 第17章　　技名とその効果

技名とは魔法を扱う際に必要な言霊ことだまの事であるが、違った言霊でもイメージと魔力量さえ間違えなければ同じ現象を引き起こすことはできる。

しかし、一般的に技にはそれぞれ名前がつけられているので、この章では技名、効果をまとめたものを紹介する。ここで紹介するものは、初級魔法と中級魔法の一部である。

### 1、火属性

#### 『ファイアーボール』

下級魔法。炎の球を作り出し、その球を対象物にぶつける事でダメージを与える。もっとも一般的な炎属性の魔法で比較的容易に使うことが可能。

#### 『フレイムアーム』

下級魔法。身体強化の一種で、拳に炎を纏いダメージを上昇させる。実際に殴るのは術者なのでダメージは腕力に影響される。

#### 『ファイアーアロー』

中級魔法。炎の弓を作り出し、対象物にぶつける事でダメージを与える。魔力量によって、矢の本数が変化する。中規模攻撃魔法。

『フレイムシールド』

中級魔法。炎の壁を作り出し、敵の攻撃を防ぐことが可能。強度は魔力量によって左右される。

『フレイア』

中級魔法。対象物を燃え上がらせる攻撃魔法。魔力の出力に微調整が必要になり、かなりの集中力があるので注意。

## 2、水属性

『ミストボール』

下級魔法。空気中の水分を集め球体とし、その球を相手にぶつけることでダメージを与える。もともと一般的な水属性の魔法で比較的容易に使うことが可能。

『キユア』

下級魔法。治療魔法のなかで最も易しいもので、怪我の治療を若干促進させる。ただし、大怪我の場合はほとんど効果が無く、擦り傷や切り傷程度のものに使用する。

『ウォーターアロー』

中級魔法。凄まじい勢いで水の球を飛ばし対象物にダメージを与える。魔力量によって、球の数が増える。

\*\*\*

「zzz...」

いつの間にか本が開いたまま顔の上に乗っかり、俺は夢の世界に旅立っていた。



\*\*\*

それから1週間、何事もなく過ぎて行つた。

王国の騎士団は問題のウォーウルフの群れをなかなか発見できず苦戦していた。

俺は午前中はオリクさんにもらった本を読み、午後は実践的な練習といったながれだった。

練習の中で炎属性に関してはかなり使いこなせるようになってきたが、闇というのはよくわからないし、こればかりはオリクさんにも相談できなかった。

そして、1週間目の夜。

村の門のところに2人の人影がある。

「はあゝ」

「なんか疲れていますか、オリク隊長？」

「ああ。タツヤの魔法の練習に付き合いすぎてな…。」

「タツヤって、あの黒髪の青年ですか？ オリク隊長を疲れさせるなんてなかなかやりますね」

まだ若い兵士がニヤニヤしながら俺に、聞いてくる。

「そりゃ、魔法を1時間半ほとんど休みなしで使われたらなあ…。」

「1時間半って！　じゃあ、今は魔力切れかかってるんですか？？」

「いやいや、そこまで弱かねえよ。」

「なぜか、残念そうな顔をする兵士。」

「そうすつか。話は変わりますが、これでウォーウルフの心配無くなりますね。」

「そうだな…。これで、子育てにも集中できるよ。」  
煙草を懐から1本取り出して俺は、吸い始めた。

「え！？　姉さん、妊娠しているんですか！！」

アンナは兵士からは姉さんとして慕われている。結婚してすぐに、兵舎の家事を担当してくれたのでとても助かっている。

「ああ。今、9ヶ月なんだがな。男の子か女の子か楽しみだよ。」

「かあゝ！　いい話つすね！！」

「だろ？　生まれたら盛大にお祝いしてくれよな？」

「もちろんっすよ！」

\*\*\*

森の上からウォーウルフの群れを搜索しているが、なかなか見つからない。

この1週間の中で4匹討伐したが、どれも1匹で行動していて群れとはいえなかった。

「何やら、胸騒ぎがするのだが…」

そう。先ほどからいやな予感がビンビンしているのだ…。

「どうしたんですかニーナ隊長？」

「いや、随分森の中心部のほうにきたが、実はもっと村の近くにいないかと思ってな…。」

きれいな夕焼けが空に広がっているが、夜になればそれだけ搜索は難しくなる。

「戻りますか？ 隊長？」

先頭の騎士が聞いてきた。

「そうだな。一度戻ったほうがよさそうだ。」

「了解」

\*\*\*

今、俺の目の前には奴らがいる。

『ベルグ盗賊団』

最近はウォーウルフの群れの影響がこの付近では活動していなかったはずだったのだが…。

その、ウォーウルフの群れも一緒にいた。

確かに魔物を使役することは可能だが、『失われた遺産』が必要になるはずだ…。

「オリク隊長どうしますか!!??」

まだ、若い彼はかなり慌てているようだ。

実際、俺は冷や汗が止まらない。

なぜ奴らが今？

「何しにきた！」

しかし、聞かないわけには行かない。

若い兵士に目配せをし、村長のところにいつてもらう。

「もちろん…。」

先頭の2本の大剣を担いだ大男が低い声で呟いたのと同時に、その剣が空を舞った。

「全て殺し、全てを奪うためさ」

大男の手を離れた剣が先ほどまで、自分と一緒にいた兵士の背中に突き刺さった。

防具はつけていたが易々と貫通してしまったようだ。

「きさまぁ!!!!!!!!!!!!!!」

そういつて、身体強化の魔法をかけ、腰から剣を抜きその男に切りかけた。

しかし、ひょいっとかわされ剣は別の男のことを切り裂いた。

『ベルグ盗賊団』

この付近では最も有名な盗賊団で構成人数は1000人を超えている。残虐かつ暴力的な性格にも関わらず統制のとれた組織で、王国も手を妬いている。

そんなやつらが、村を襲いにきたのだ。

「少しでも時間を稼がなくては…」  
それが俺に出来る唯一のことだった。

しかし、1対100では勝ち目など無い。  
あつという間に自分の脇から、村への進入を許してしまった。

それでも最後の足掻きとして、門の内側に巨大な岩の壁を作り上げる。

魔力切れなど構わなかった。  
大切な人を守るのなら…。

「めんどくせえことしゃがって。」  
そっいいながら、先ほどの男がもう1本の大剣を抜いた。

反射的に剣を構えたが、足元がおぼつか無い。  
振り上げらる大剣。

「アナナ…」

そして、俺の意識は途絶えた。

\*\*\*

「ふあああ」

夕食後にオリクさんが見張りに行くまでの間打ち合いを行ったせい  
か、少し寝るはずだったのが、随分寝てしまったようだ。魔法は思  
っている以上に身体に疲労をもたらす様だ。

しかし、何故か異様に暑い。

まだ、半開きの目で部屋を見渡す…。

そこで、俺は跳ね起きた。

火 火 火 火

見渡す限り、火の海である。

ベットのシーツにも、火が移った。

「な！！！！」

一瞬、慌てたがすぐに部屋にある唯一の窓に目が行く。  
身体強化されている俺の身体ならなんとかなるだろう…。  
そう思いながら、頭を抱え込むように窓にダイブした。

パリーン。

ガラスの割れる心地よい音と共に俺は、兵舎から外に飛び出した。

「いてっっ！！」

さすがに無傷とは行かなかったが擦り傷程度だ。

振り返るように兵舎を見ると…  
燃えていた。

ゴオオオオという音が聞こえそうなほど勢いよく燃えていた。  
空が既に暗くなっていたので、その炎はやけに明るく見えた。

「あ！」

目の前前に倒れている人がいたので慌てて近づく。  
兵舎はいつ崩れてきてもおかしくない状況だったので、そこにいる  
のは危険すぎた。

「大丈夫です……ひっ！」

倒れていた人は、何度か兵舎で見かけた兵士の1人だった。  
しかし、すでに帰らぬ人となっていた。

仰向けにすると腹を切り裂かれ驚愕に目を見開いていた。

「うげええええ。」

吐いた。

その人には、悪いが気持ち悪いと思った。

確かに自分が死んだときの映像のほうが数倍グロテスクだったが今  
は感触がある。

まだ、生暖かい血。氷のようにつめたい肌。

数分間吐き続けて、やっと落ち着きを取り戻してきた。

「なぜ、この人の傷は切り傷なんだろうか…。」

そのとき、後ろで悲鳴のようなものが聞こえた。

ハッと後ろを振り返った瞬間、目を伺った。

俺の目に入ってきたのは変わり果てた村の姿だった。

先ほどまで自分が歩いてきた道には無数の人の死骸が転がっている。並んでいた家や店が炎に包まれ、パチパチッと音を立てている。

…そして、広場のほうから叫び声が聞こえてくる。

何があつた？

わからない。でも、まだ生きている人がいるかもしれない…。

走った。

無我夢中で走った。

身体強化されているせいか、ほとんど一瞬で兵舎から広場までの200mの道のりを走りきった。

しかし……遅かった。

「何だ…これは？」

自分でもわかる。声が震えている。

そんな俺の目に入ってきた物は、まさに『地獄絵図』だった。

串刺しにされた女性や女の子の死体。

脇に積み上げられている男性の死体。

そして、その場でまるで祝杯をあげるかのように叫びまくってる男



共。

そのうちの何人かはすでに死んでいるはずの者を犯していた。  
真ん中のほうには、死体をむさぼるウォーウルフの姿があった。

俺はそれを見て、吐きそうになったが…ある一点を見つめて硬直した。

それは…一際高いところにある串刺しの死体だった。

「アンナさん…。」

ちよつと男毛のあるアンナさん。

部外者の俺にも優しくしてくれたアンナさん。

たった1週間しか一緒にいなかったけど、とても温かい人だった。  
さつきも笑って、「ゆっくり休んでね」って言うてくれたアンナさん。

それなのに、裸にされ、串刺しにされて…。

おびただしい量の血液が溢れ出している。

「おい。まだ、生き残りがいたのか？」

祝杯を挙げていた一人が俺に気付き、近づいてきた。

「みたいだなあ！…ん？黒髪？」

その声を聞き、数人の男が集まってきた。

「ボスどうしますかあ？」

「知るか、殺せ。」

ボスと呼ばれた奴が、一体のウォーウルフの頭をなでながら答える。

「…なあ。この人、殺したのってお前らか？」

泣きたい。吐きたい。でも、聞かなくてはならない。

「何？ お前、こいつの恋人？ キヤハハハ。そうだよ！そうだよ！こいつは最後まで抵抗したから、皆で犯しまくって殺したんだよ！！」

大笑いしながらこいつは答えた。

周りの奴らも、それに便乗するように笑い出した。

「ざまあねえな。兄ちゃん！ 早く死んで、この女のところに行けよ！」

そっいいながら男が腰から剣を抜いた。

\*\*\*

アンナさんが死んだ。

いや、殺された。

誰に？

あいつら。

なんで？

抵抗したから？

そんなノが理由？

ソウダろ。

ならアイツヲ殺してもイイ？

イイニキマツテルジャン。

シネバイイ。

ジゴクニオチロ。

コロシツクセ。

\*\*\*

先ほどの青年がこちらを見つめている。

真紅の瞳が暗闇の中で、やけに輝いて見える。

「ボス！こいつ、魔術師で…」

メンバーの一人であったその男は最後までしゃべれなかった。

首が消え失せたのだから。

「へ？」

周りの仲間のやつには何が起こったかわからなかった様だ。  
俺にも、正直わからない。ただ、仲間が一瞬で殺されたということ  
だけだ。

次の瞬間。

死体を犯していた奴らの手が、首が、足が。バラバラとなって地面  
に落ちた。

俺は夢でも見ているのだろうか？

今までは、すべてうまくいっていた。

最近では、この指輪によってウオーウルフ5体を使役することが出  
来るようになり既に敵は無かった。  
しかし、これは何だ？

目の前の黒髪の男は、先ほどから一步も動いてはいない。

俺も、魔術師だから膨大な魔力がうごめいているのは分かるがそれ  
が何なのかは分からない。

そう。属性すらわからない。

また、仲間が死んだ。

首から股まで一直線に裂かれていた。

ここにつれてきた113名の仲間のうち残っているのは既に、30  
名ほどだ。

「お、お前らそいつを殺せ！！」

今になって、慌てて仲間に命令する。

しかし、本能的に無理だとわかった。

何だ、この感情。今まで感じたことの無いもの？

そうか……。これが恐怖だ。

自分よりも圧倒的な物を前にした際に起こる感情。恐怖。

果敢に剣を抜いた仲間もまた、一瞬でバラバラとなる。

そして、そいつが近づいてきた。

一步。一步。それが自分の命のカウントダウンのように思えた。

今まで、暗闇にいたから気づかなかったが、そいつは黒髪の男だった。

その目は、先ほど不気味に光っていた真紅の瞳であり、今にも吸い込まれそうな恐怖に駆られる。

さらに、明るみに出たことによってやっとわかった。

そいつは、黒い炎を身体に纏い、そこから黒い鎌のような物が数十本出ていた。

まさに、『死神』だ。

「闇？」

最後の一人となった俺だが、まだウォーウルフがいる。  
指輪に力を込め、指令を送った。

ウォーウルフが5体同時に、走り出しそいつに噛み付こうと飛び掛った。

毒のある牙で、かすり傷さえつけられれば形勢は逆転するはず。そう思っただけだ。

飛び掛った瞬間、真紅の瞳がギリリと光ったかと思うと…既に地面にはウォーウルフの無残な残骸が転がっていた。

俺の目が追えたのは、黒い鎌が若干動いた様子だけだ。

そして、俺は一人になった。

「す、すまなかった。もう、こんなことはしない！！ だから、命だけは命だけは助けてくれ！！」

もう、仲間のいないから最後の命乞いをする。

既に、ボスのプライドなど存在しなかった。

瞬間。

指に激痛が走った。

いつの間にか10本の指がバラバラと空中を舞っていた。

「ぎいいいいああああああああああああ！！！！ 指があ

！！ 俺の指があああ！！」

しかし、叫んだのもつかの間、今度は耳が飛んだ。

「ぐあああああぎいいああ

続いて、舌が飛び…。

鼻。手。足。

そして、最後に首が飛んだ。

\*\*\*

遠くからでも分かった。村が燃えている。

「予感が的中したか…。」

そう呟きながらペガサスを急かす。

「ニーナ隊長。見えてきました!!」

やっと村の門が見えてきたので、着陸態勢に入る。

他の騎士もそれに続く。

つと、門のところに一人の男性が倒れていた。

どうやら、剣で斬られたようだ。

ペガサスから降りて仰向けにすると、一度話したことのある人物だった。

「オリク殿…」

剣を握り、目を見開いたまま、亡くなっていたのでそつと目を閉じさせる。

この1週間の間に何度か話したが、なかなか気のいい男だった。

「ニーナ隊長。」

「ああ、判っている。」

いつまでもここにいるわけには行かないので、ペガサスにまたがり村の広場へと向かった。

家が燃えているが、道のほうには崩れてこなかったのですぐに広場に着いた。

しかし、そこは地獄だった。

串刺しの死体。

積み上げられた死体。

しかし…

「これは、『ベルグ盗賊団』の旗ではないか？」

蛇に剣を突き刺したデザインのこの旗は、被害にあった村で数多く発見された物だった。

そして、脇に転がっているバラバラの死体の肩の部分に同じようなタトゥーが入っている。

ペガサスから降りた私は、周りを調べつつ先に進んでいく。

そこには、ウォーウルフの5体の死体ごろがっていた。傷口を見る限り、切り裂かれたようだ。

しかし、これほどの腕前の者がいるなど…。



そして、目の前の事実がこれらの死体などとは比べ物にならないほど私を驚愕させた。

その男は立っていた。

身体に黒い炎を纏い、真紅の瞳で私を貫くように見ていた。

口元は閉じ、周りの死体に目をやることなく私を見ていた。

「タツヤ？」

その青年の名前を呟いてみる。

すると、その男は崩れ落ちるように倒れた。  
慌てて駆け寄り、それを支えてやる。

「おい！」

他の騎士団の者を呼ぶ。

すぐに駆けつけた隊員に王国に応援を頼むように、伝令を頼んだ。

そして、自分に倒れこんできた青年の顔を覗き込む。

どうやら、彼は魔力切れで倒れたらしい。

「なあ。タツヤ。君はいつたい何者なんだ？　ここで何があった？」

答えが返ってこないのは判っていたがそう呟かずにはいらなかった。

## 第6話 闇（後書き）

今回の内容はかなりダークなものだと思います。

なぜこのようなものを出？ と疑問に思われたかもしれませんが、闇属性を使うという設定上、このような展開になりました。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 第7話 夜が明けて（前書き）

昨日の話から一夜明けてからの話です。

どうぞ ^^

## 第7話 夜が明けて

昨日の一件から既に、数時間経過し太陽がうつすらと顔を出していた。

王国には、直ぐに情報が伝わったが、陸上部隊の到着までにはやはり時間がかかる。

私達は、風の魔法と水の魔法を併用してなんとか鎮火し生存者の探索を行った。

まだ全てを見終わったわけではないが、生存者はいなかった。

そう。ただ一人を除いて。

そう思いながら、毛布に包まれたままピクリともしない黒髪の私よりも若い青年を見る。

その姿からは、昨日の禍々しい様子は想像がつかない。

しかし、昨日のことは全て現実だ。

それは村の傷跡を見れば一目瞭然となる。

「貴方は、本当に何者なの？ 昨日のは魔力が暴走したとしか思えないし……」

『魔力の暴走』

それは、まだ魔法を扱って間もないうちに多大な恐怖や怒りの感情によって、なりふり構わず魔力を使い切るまで魔法を行使することを指す。

一般的に自分の中の魔力を認識してしまうと、暴走することはない。

それは自分の意思で水にもぐっている時と同じである。呼吸が続かなくなってしまうと我慢することは出来ても、ある一定のところでは必ず浮上する。そのまま死ぬことはありえない。

これは、人間の深層意識に影響される現象である。そう。魔力も基本的にはこれと同じ考えだ。

だが、暴走は実際に起こっている。原因は明確には判っていないが暴走は、魔力を完全に認識し切れていない人間にしか起こらない。暴走の影響により命を落とすことも少なくはないが、暴走を経験することにより魔力量が増えたという事例も報告されている。

「わからないことが多すぎるわ……」

タツヤが纏っていたあの黒い炎、自分達が討伐するはずだったウォルフの群れ。

そして、『ベルグ盗賊団』が何故あの村を襲ったのか。全てが謎だった。

「どう報告すればいいのやら……」

一人、途方に暮れていた。

「ニーナ隊長。陸上部隊、到着しました！」

新人騎士が私のところにやってきて報告した。

昨日、あれほど吐いていた姿と比べると別人のようだった。

「ありがとう。あなたは少し、落ちついた？」

「はい…。さすがにあのような死体を目にしたのは初めてだったので…。お見苦しいところを見せてしまいました。すいません」

「謝らなくていいのよ。初めてであの惨状は耐えられるものではないわ。」

そっぴいながら肩をポツと叩いてやる。

「さて、陸上部隊の代表者のところにいかなくちゃ」  
よつと立ち上がり。陸上部隊のところまで歩いていった。

「王国航空部隊第2番隊長、ニーナ・ヴィクトリアです。早急な対応ありがとうございます。」

一礼し、陸上部隊のほうに目をやる。

「ご丁寧にありがとな、ニーナ嬢ちゃん。あ、一応言っとくが王国陸上部隊第1番隊長、ジヨマンダー・ブリティシュタインだ。…にしても久しぶりだな嬢ちゃん。」

「嬢ちゃんはやめて下さい、ジヨマンダー將軍。それにしても、騎士団長でもある貴方がわざわざやって来るなんて意外ですね。」

「うむ。我が王は前々から『ベルグ盗賊団』の対応に困られておられたからな、今回は確認作業と残党の掃討にやってきたのだよ。」  
銀色の顎ひげを撫でながら、ジヨマンダー將軍が答えた。

「さて、早速で悪いが詳細を頼む。」

「は！」

いくら昔からの知り合いとはいえ、騎士としては尊敬すべき人物であるジョマンダー将軍にはそれ相応の態度がある。

「昨日未明、私達がペガサスに乗り依頼されていたウォーウルフの探索中に事件は起きました。門のところに集まった『ベルグ盗賊団』は、村の警備をしていた2人の兵士を殺害した後、村へ侵入した模様。」

炎の魔法とたいまつなどを使用し、家々を燃やして回りつつ男はその場で女は広場のところで殺していたようです。女子供については、串刺しにされ辱められた模様」

吐き気のするような内容だ。

「なるほどな。それで、結末は？」

「詳細はわかっていませんが、私達が戻ってきたときには何故か100人近い盗賊団の死体とウォーウルフの残骸が転がっておりまして。誰がやったのかは不明ですが、その死体の中に1人の生存者がいたので保護しました。」

「ふむう……。生存者は一人だけか？」

何やら考え込むしぐさをした後、ジョマンダー将軍が聞いてきた。

「はい。残念ながら、1人の青年を除いて全員亡くなっているようです。」

「そうか。その青年からも話を聞きたい。ここに連れてきてもらえるか？」



やはり。というか絶対言ってくるだろう要求だった。

「申し訳ありません、ジヨマンダー將軍。その者は魔力暴走を起こしたらしく…今は、昏睡状態です。」

「魔力暴走だと？ これはまた珍しい現象が起こったようだな。しかし、詳細が聞けないのは困るのだが…」

そう。結局、タツヤが起きないと何も判らないのだった。

「とりあえず。王国まで連れて帰り、意識を取り戻すのを待つしかありません。」

昨日、色々考えてだした結論だ。

「嬢ちゃんがそういうなら、しょうがねえな。おい！ 残党の搜索と死体の判別、頼むわ」

「了解しました」

そういつて陸上部隊の数人が探索を始めた。

「原因究明に全力を挙げていますが、やはり証言がないとあくまで予想にすぎません。ですが、これに関しては間違えないでしょう」  
そういつてウォーウルフについていた首輪と、盗賊団のボスだと思われる死骸が身に着けていた指輪を見せる。

「ん…これは『古代の遺物』か!？」

「ええ。そうだと思われます。あまり群れを作らないウォーウルフが集団で行動していたのは、これを使い操られていたかと思います。」

「この問題は、わしらが思っていたより深刻なようだな…。まあ、『ベルグ盗賊団』が壊滅したのは朗報だがな。」

「それで…この後どうしますか？ ジョマンダー將軍」

「亡くなった者の埋葬が済み次第、王国に帰還する。その青年とやらの身体に異常が無いか調べる必要があるからな。」

「わかりました。では、一度さがります。」

そう言つて、私は航空部隊の仲間のもとに戻つた。

\*\*\*

「埋葬、搜索、終了しました。」

ペガサスの手入れをしていた私のところに部下がやってきた。

「ご苦労様。ジョマンダー將軍はなんと？」

「1時間後に出発するとの事です。航空部隊も同行せよとのことですよ。」

「わかつたわ。調査結果を教えて頂戴。」

「は！ 村人死亡者201名、盗賊死亡者107名です。損傷は村人は大剣などで押しつぶされた者や蹴り殺された者が多いのに対し、盗賊は非常に鋭い刃物で斬られたようです。」

「何か異常は？」

「盗賊の死に方ですね。すべて斬り傷なのですが、切断面がぴったりに合ってますよ。しかも、全員その刃物で切られたらしいので同一犯かと…。それと、また、村の外壁の一部を破壊されており、盗賊団の一部は逃走した模様です。これに関しては探知魔法で、ある点で止まっているようです。盗賊団のアジトである可能性が高いかと…。」

「アジトに関しては事が収まり次第襲撃をかけるように要請する。被害から考えて一小隊で十分対応できるだろう。それよりも、王国が手を焼いていた100人以上いた盗賊団をたった一人で殺したということか？」

「そういうことになりますね…」

「どういうことだ？私のはてつきりタツヤの魔力暴走に巻き込まれて盗賊が死んだのかと思っていたが、この前見た限りタツヤの属性は火だ。」

「炎の刃なら切断面は焼けてグジャグジャなはずだ。風ならうまくいくかもしれないが…」

「その切り傷というのは家屋などには付いていたか？」

「いえ。ジョマンダー將軍にも言われて調べたのですが一切そのような跡はありませんでした。」

「風属性のカマイタチなら切断面はきれいだが、狙いがつけにくいため家屋などにも傷が傷が付く。」

「つということは、よほど整った剣先の刃物で切ったのだろう。」

「第三者がその場にいたのか？」

「それなら、なぜタツヤは魔力暴走を起こしたのだ？」

あんな黒い炎見たこと無いし…。  
また、謎が増えたただだった。

「ニーナ隊長。そろそろ出発しますので、門のところまで来てください。」

新人騎士も今回の件で随分、騎士らしくなったものだと思しながら門まで向かう。

けが人のために用意された馬車にタツヤを乗せ、私たちは王国の首都であるフリージアに向かった。

\*\*\*

これは、夢なのか…？

オリクさんのニヤニヤ笑う姿。

アンナさんのちよつと厳しそうな顔。

村を走り回る子供たち。

挨拶をするとき必ず笑顔で返してくれる老人方。

1週間滞在している間にこんなに温かい場所があるのかと思うほど平和な村。

村長は厳しそうな顔をしているのも、村の存続のために様々な努力をしているからだろう。

しかし、その人たちは死んだ。  
それは、避けられないことだったのかもしれない。

でも、もう少し早く俺が目覚まさせていたら何人かは救えたかもしれない。

無残に殺されたアンナさんとそれを笑う下種野郎共を見た瞬間、怒りが爆発した。  
何をしたのかはおぼえている。

全てを殺した。  
残虐かつ冷酷に…。

黒い刃で…。

初めてそれが現れた瞬間、本能的に使い方がわかった。

ミカエルの言っていたもう一つの属性。闇。

炎。闇。

どちらも破壊のための物だろう。  
現に俺は一人も助けられなかった。

弱い俺は…。

あれ？

なんか温かい。

でも、この温かさは俺には似合わないだろう。

\*\*\*

ガバツ！

シーツを捲り上げるように俺は跳ね起きた。

「ヒイツ！」

小さな叫び声が聞こえた気がした。

「…ここは何処だ？」

見慣れない天井。見慣れない壁。

明らかに、昨日の村の物ではないと思われた。

…バタツ。

また、意識が闇に落ちた。

## 第7話 夜が明けて（後書き）

いかがでしたから？

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 第8話 地獄の業火（前書き）

執筆始めて1週間経ちました。

予想をはるかに超える読者の方々に感謝、感謝です。

これからも頑張っていけますので応援よろしく願います。

それではどうぞ。



## 第8話 地獄の業火

私は、今日もこの青年のところにいる。

父様に言われ、魔力暴走にもっとも効果があるといわれている光属性特有の癒しの魔法をかけているがなかなか目を覚まさない…。

毎日1時間程、かけているが時より苦しそうな顔をするだけであまり大きな変化は無い。

光属性の魔法による治癒魔法は水属性の物とは異なる。

基本的に水属性の治癒魔法は身体の外側から外相などを治すのに対し、光属性の治癒魔法は身体の内面から病気や呪いなどを治す。

この青年は、1週間ほど前に魔力暴走を起こしたりきり一向に目を覚まさない。

話によると、あの有名な『ベルグ盗賊団』に襲われた村の生き残りだそうだ。

そのため、重要参考人として丁重にもてなす必要があるのだ。

「それにしても、何度見ても黒髪とは珍しいですね…」

そうつぶやきながら、彼の髪に触れようとした瞬間、彼が起きた。

突然、ガバツつとシートごと飛び起きた青年のせいで私は床にずれ落ち、咄嗟に「キャッ」つと声が出た。

文句を言おうと、床から立ち上がり彼のほうに向きかえったが…

「寝てる…」

クシャクシャになったシート以外は先ほどと何も変わらず、規則正しいリズムで彼は寝息を立てていた。」

\*\*\*

「ん…」

静かに目を覚ますと、目に入ってきたのは見知らぬ天井、見知らぬ壁だった。

一度見たことがあるような気がするが気のせいだろう…。

ゆっくりベットから抜け出し、部屋を見渡す。

カーテン付きのベットに、金縁の絵画、いかにも高そうな壺が置かれていた。

「どこだ…ここは？」

ひどく頭痛がする。様々な情報が身体に入ってくる。そんな感じが確か…俺は村で、火事に巻き込まれて、死体を見つけた。そして、悲鳴が聞こえて…アンナさんが。。

思い出してきたら涙が出そうになったのだが…何故か泣けなかった。

そして、同時に自分が手に掛けた数多の命。

あんな野郎達でも家族はいたのだろうか？

人生に希望があったのだろうか？

殺すことを肯定し、それでもかといわんばかりに残虐かつ冷酷に殺したのだが…

思い出していくうちに吐き気がしたので、近くの窓を開け放つ。

そこから、吐いた。否、吐こうとした。

口の中に酸っぱい味が広がるだけで固形物は出てこなかった。

それでも、その動作を数回繰り返した。

約1時間、そうしながら夜風に当たるうちにだいぶ気分がマシになってきた。

いつの間にか頭痛も無くなった。

とにかく欲しいのは情報だ。

そう思った俺は、すぐさま近くの扉を開け放った。

扉から出ると、そこはどうかやら廊下のような。

赤じゅうたんが敷かれており、左右に絵画が掛かっているところをみると相当な金持ちの家のような。

誰にも会うことなく、廊下を進むとエントランスホールに出た。

左、右に分かれている階段。下の階にある巨大な扉、吹抜けになっている天井にステンドグラスとまるで、何かのお城のようだった。

「城？」

ふと自分が思ったことに疑問を感じた…。

昨日まで俺は、村にいたはずだ…そこで、魔法を使って…気絶して…誰かがここに運んだ。

状況が全くの見込みないまま下を覗きこむと、きつちりと武装した兵士が4人立っていた。

もし、自分が囚われの皆なら闇の魔法であの野郎達と同じように殺すか気絶してもらおうと思ったのだが、あの鎧の紋章には見覚えがある。

「あの紋章って、確か二ーナさんの着ていた鎧にも付いていたな…」  
そんなことをつぶやきながら観察していたのだが…

「何者だ!! 貴様!!」

あっさり見つかってしまった。

「おい! 応援を呼べ!! 城内に不審者が入り込んだぞ!」

「ちよっ!!」

俺に弁解を聞く間も無く、兵士達が俺の周りを取り囲む。  
それぞれが剣を突き出して完全に包囲されてしまった。

兵士との距離、約1.5m

そして、その数はどんどん増えていった。

「貴様、何者だ?」

「何処から入った?」

「誰の使いだ!?!」

「武器を捨てろ!」

兵士達が口々に叫んだ。

「いや。いっぺんに言われてもわからねえよ…」

やけに統率の取れていない兵士達だった。

そして、そのうちの一人が斬りかかってきた。

普通、事情聴取くらいするのでは? と思っただが命の危険には替わ  
りない。

「フレイムメール!」

俺の身体を一瞬で炎の鎧が纏った。

これは村で大虐殺を行った際に使った技だ。オリクさんにもらった本にも書いてあった魔法だ。

しかし、あの時は閻属性も混ざり全く別の魔法になっていたが……。その上、ほとんど制御不能でただ相手を殺すということにのみ特化した技だった。

オリクさんとの特訓の成果でイメージしやすい魔法なら言霊のみで既に発動することはできる。あの人が曰く、魔法に関してはかなりの才能の持ち主だとの事。

「な！ こいつ魔術師だぞ！！」

一気に兵が引き、弓矢や杖らしき物を向けられた。

エントランスホールに緊迫した雰囲気が漂う。

徐々に兵士達の顔も厳しくなってきた。

そして、ゴォーと燃える炎を纏う俺はなんなんだろう……。つというかここは一体…。

緊迫した雰囲気は3分ほど続いたときだった。

「ニーナ將軍こちらでございます。賊が魔法を使ったため、今だ手を出せておりません」

シーンとしたホールにその声はやけに響いた。

囲んでいる兵が割れ、1人の女性騎士が出てきた。

「そうか、あいつだな……。え？」

ポカーンとするニーナさん。

「あれ？」

俺も、その様子を見て一気に力が抜けた。  
同時に魔法も解除した。

それを見た兵士がチャンスといわんばかりに  
「か、かれ!!」  
と叫び、俺にかかってこようとしたが…。

「やめなさい!!」  
ニーナ將軍でも俺でもない…誰かの声がエントランスホールに響いた。

コツツ。コツツ。タタタツ。  
「この方は、客人です。今すぐ、引きなさい!!」

「コッコッコッつ!!!!」  
兵士達の顔が一気に青ざめて跪く。  
そして、蜘蛛の子が散るようどこかに行ってしまった。

残されたのは、ニーナさんとその横にいる兵士、そして…謎の女の子だった。

その女の子が俺のほうに向かって歩いてくる。  
身長は俺よりも小さいがすらつとした体型、銀色の髪の毛を腰の辺りまで伸ばし、蒼色の瞳をした美少女だ。  
はつきり言っている。こんな人、地球ではお目にかかったことが無い。

凜とした姿で、俺の元までやってきた。

「目が覚めたなら、まず使用人にか誰かに報告してください。急になくなったので城内を探し回りましたよ!」

いかにも高そうな洋服に身を包んだ少女が、少し頬を膨らませて怒っている…。

「すみません…」

何故か謝る俺。

「それに、いきなり城内で魔法を使うとはどういう神経ですか??  
だいたい…」

「あのお…。今ひとつ状況が飲み込めないので一から説明してもらえませんか?」

一方的に怒られそうだったので、そう頼んでみる。

すると…なぜか近くに残っていた兵士が青ざめ始めた。

「私が説明しましょう。」

後ろにいた、ニーナさんが不意にそう言い、説明しだした。

「タツヤ。君があのか村で発見されて既に10日程経過している。ここはアルバニア王国、首都フリージアのシャンネルグ城よ」

「10日!?　ってか、何で一般市民である俺が城なんかにいるんだ?それよりも、あれはやっぱり…」

「まあ。最後まで話を聞きなさい」

少々呆れ顔でニーナさんがそう言うと言続きを語りだした。

「あの日、私達が討伐から帰ってこようとしたときに村から火の手が上がっているのに気がついたの。そこで、私達は急いで村まで戻ってきたけど…遅かったの」

そういつて一旦言葉を切るニーナさん。

「私達が村に着いたときにはもう村中が炎に包まれていた。門のところに倒れていたオリク殿をはじめ村の兵士達、一般の市民の人々も殺されていた。」

「…オリクさんも亡くなったのですか？」

今まで生きていると思っていたので、かなりのショックが襲い掛かってきた。

そんな様子を見ていた兵士達が一礼し何処かに行った。

「ええ。たぶん、村を守ろうと戦ったのね。岩が隆起した様な跡や、何人かの盗賊の死体もあったから…」

「そうですか…」

オリクさんは最後まで戦ったのか…。無事に死後の世界でアンナさんと会えればいいな。

一度死を経験した自分が言うのも変だが、死んだ後の天界で一緒になれば幸せだろうと心から願う俺だった。

例え、アンナさんが悲惨な死に方であろうと…。

自分の死体は肉片のようになっていたが、地獄に落ちたときの五体満足だった。

たぶん、死んだ時の状況は死後の世界では関係ないのだろう。

「ねえ。ここじゃアレだから…とりあえず私の部屋まで来て頂戴」



銀髪の女の子がそう言ったので、お言葉に甘えて部屋に向かうことにした。

先ほどとは違う廊下を歩いている間ずっと、オリクさんのことをはじめとする村の状況を教えてもらっていた。

ある扉の前で女の子が足を止め、中に入るよう促す。

そして、室内にあったソファーに3人とも腰掛け話の続きをする。

「つまり、あの村で生き残ったのは俺だけで盗賊や村人は全滅だということですか？　それで、俺は重要参考人として連れてこられたと」

「ええ。そういうことね。貴方の話で大体の事情は掴めたんだけど、何故盗賊が死んだのかだけがわからないの…」

「それは、私からも聞きたいわ。王国の騎士団ですら高い戦闘能力のせいでなかなか討伐にいけないかったのにどうして一夜にして壊滅したのか…理解できません」

2人とも何かを期待するような目で俺を見てきた。

ふうーと一息ついて

「まあ、どちらにしろ言うつもりでしたが…。あの盗賊は俺が殺しました。」

俺は、静かにそう告げた。

「え？」

二ナ隊長も女の子もキョトンとした表情だ。

「あの盗賊は俺の魔法で殲滅しました。」

あのと時の状況を思い出しながら、もう一度、簡潔にそう伝えた。

「ちょっと待つて！！ それはおかしいわ。私達は貴方が魔力暴走を起こして気絶したところを保護したのよ？ 仮に貴方の魔法で死んだとしても、盗賊の傷跡はとんでもなく鋭利な刃物で斬られた跡だった。いくら魔力暴走したからといえ貴方の火属性の魔法には不可能な芸当よ」

「そ、そうよ！ 報告で聞いている限り剣の達人がその場に訪れ、盗賊団を一網打尽にしたというのが一般的な説で……」

2人とも俺を全く信用せずに、それぞれの言い分を並べた。

「2人とも、落ち着いてください。あの時、確かに俺はいつもの状態ではありませんでした。より残酷に、より冷酷に人を殺しました。それは俺がたった1週間だけお世話になったとても面倒見のいい方が惨殺されているのを見て頭に血が上ったからです。あたりまえですよね。そしたら、自分の中の魔力のリミッターが壊れ、ありったけの魔力であいつらを殺しました。……殺したんだ」

あの惨劇を思い出すだけでも、再び怒り狂いそうだ。

「……でもね、タツヤあなたの炎ではあんなに殺し方は出来ないの。切断面がピッタリ合う斬り方なんて風魔法でも相当な使い手じゃないと出来ないの。……だから、やっぱりあなたが魔力暴走をおこしても、その芸当は不可能だわ。」

うんうん。

と女の子も同じ意見のようだ。

「何といわれようと、俺が殺しましたのは事実です。捕らえたいなら捕らえてください。たとえ敵討ちのような形であれ、人を殺したことにはかわりはないのですから。」

そう。俺は生まれて初めて人を殺したのだ。日本なら確実に死刑だろう。この世界でも殺しはきつと罪になるのだろっ…そうならば、罰を受けなくてはならない。

覚悟を決めている俺に対して2人は

「…」

顔を見合わせている。どうも信用されていない。呆れてすらいるようだ。

っというか、この2人はあの悲劇を客観的に見ただけでわかった気になってるのではないのか？

それにも関わらず人の覚悟を踏みにじるとは何様のつもりだ？

始めはアンナさんとオリクさんの死という事実でのショックが大きすぎて、淡々と語っていたが感情が高ぶるに連れてムカついてきた。そもそも、王国の救援が来ていながらあんな惨劇を起こしたことに對して弁解の言葉があってもいいのではないのか？

「証拠は？ 何か、証拠は無いの??」

そんなに、信用なら無いならこいつらに見せてやろっ。

「…んじゃあ、見せてやるよ。」

そう言つて、2人をギロリと睨みつけた。

\*\*\*

「あの盗賊は俺が殺しました」

今、目の前の青年はなんと言つた？

あの『ベルグ盗賊団』を1人で壊滅させた？

ありえない。

つというか、私と同じくらいの歳でそんなことが出来るはずない。それに、報告が上がってきた鋭い刃物で斬られた傷跡など並の人間に作れる代物ではない。

私がこの青年に治癒魔法をかけている間に、様々ケースをにーなにくれた情報と合わせて考えてみたが、この青年に盗賊団を壊滅させることは不可能だった。

しかし、この青年はやったと言う。

わからない…

私自身、現場に行ったわけではないが村人が全員死ぬというのは悲惨なことなのだろう。

そんな中にいたせいで頭がおかしくなったのではないかとすら思った。

そんなことを考えながら二ーナと顔を見合わせた。すると、目の前の青年から嫌なオーラが漂ってきた。

「じゃあ見せてやるよ」

青年の静かな声。

その声を聴いた瞬間、身体が硬直した。なんて、冷たい声。まるで、地獄のそこから語りかけられているかのよう…。

青年の真紅の瞳が一際輝いたと瞬間、身体が震えだした。

何…これ？

あの青年がやっていることなの？  
怖い…。

怖い…。

……………。

\*\*\*

今度は闇の魔法もしっかりコントロールできた。  
前回のよう闇雲に魔力を放出するのではなく、一部の対象に向け  
闇魔法を開放する。  
無論、黒い炎の鎧は発動している。

この黒い炎の鎧は、攻撃にも防御にも役立つ。  
何本の鎌のようにして切り刻むことも、相手の魔法を包み込み粉砕  
することも可能だ。

魔法とは不思議な物で一度認識するとその使い方を自然と身体が理  
解する。

そのため、一度認識さえしてしまえば使い方や性質もわかってくる。

つというか今、それをまさに体験中だ。

闇。それは、明確に形が無い影の存在。

人々に恐怖を与える存在…

つと気がついた。

少しむかっていたこともあり、あの2人に発動した魔法の存在を忘れていた。

魔法というより闇の魔力そのものをぶつけていたのだが…。

二ナさんは焦点が定まっていないう、女の子はヒクヒク泣いていた…。

「…しまった！」

女の子を泣かすのは男として最低な行為だと思う。  
慌てて、魔法の発動をやめた。

不意に、アンナさんの怒っている顔が脳裏に浮かんだ。  
『こんなことで誰かに八つ当たりすることを私達は望んでいない』  
そんな事を言われている気がした。

それでも、アンナさんの無残な殺され方を忘れるわけが無い。  
復讐は終わった。…しかし、この後はどうすればいいのだろうか？

『新たな世界での生活を楽しんで』  
ミカエルに言われた言葉を思い出した。

楽しむ？…今の自分にできるだろうか？  
わからない…。

それでも、先ほど感じていた怒りは殆ど消えうせていた。

しばらくすると、2人が落ち着きを取り戻しはじめた。

「すみませんでした」

そんな2人に素直に謝る俺。

アンナさんのこともあるが、自分のした行為に非があるのは事実だ。

「…今のは、何？」

二ーナさんが真剣な顔つきで聞いてきた。

「俺の属性魔法です」

もつと怒るかと思ったのに、全く気にしていないようだ。

「属性魔法だと？ 火属性にあんな魔法があるなど聞いたことが無いが…」

「いえ。俺の属性は火属性だけではありませんよ？ ほら。」

そついつて、右手に炎を左手に黒い煙のようなものを纏った。

「っ！…なんだ…それは？」

二ーナさんが目を見開き、女の子は「ひッ！」と小さく悲鳴を上げた。

そんな様子をみて、魔法を消した。

またやってしまった…。

「すみません。俺の属性は、火と闇です。正確には『地獄の業火』ですが…」

『地獄の業火』

罪人を焼き尽くすための物であり、人々の畏怖の象徴的存在。そし

て、俺の魔法はそれを具現化するものだ。  
具現化といってもこの世界では闇と火属性の2種類のことを指すの  
だが、それだけでは計り知れない物も存在する。

これらの知識は俺が眠っている間に、頭の中に流れ込んできた知識  
のようだ。

気付いたら知っていた。当たり前のように理解していた。  
そう。まるで子供がいつのまにか言語をしゃべれるようになってい  
る。そんな感じだ。

「2属性持ち、セラフィストだど!？」

『地獄の業火』という言葉は完全にスルーされ、ニーナさんが叫ん  
だ。

「セラフィストって何ですか？」

また、知らない言葉が出てきた…。

「ありえない…。しかし…」

「あのおゝ」

何やらブツブツ呟いているニーナさんにもう一度声を掛ける。

「っ。ああ。セラフィストだな。セラフィストとは2属性の魔法を  
使う者のことを言うのだが非常に稀な存在で、最後の記録は6年前  
に一人の老人が保持しているのを確認したのが最後だ」

「へえゝ。んで、俺が盗賊を殺したということは信じてもらえたか



？」

やっと、本題に戻れた。

「信じるしか無いだろう…。セラフィストに闇魔法。驚くことが多すぎてな…」

つというかニーナさん、随分男っぽい口調になったな…。

あ、でも部下に命じてるときはこんな口調だった気がする…。

「オホンッ！」

部屋の隅からわざとらしい咳が聞こえた。

銀髪の女の子だ。

「私のこと忘れてるんじゃないでしょうね？」

どうやらちょっと怒っているようだ…。

まあ、忘れていたのは否定しないが。

「そういえば、ニーナさん。この女の子って誰ですか？」

「タツヤ!!!」

何故か、目の色を変えて怒るニーナさん。

「女の子ですって……まあいいわ。私はフィーナ・エルサレム・ヴィ・アルバニア、このアルバニア王国第一王女よ」

先ほどまでのビクビクした雰囲気ではなく、どこか威厳を感じさせるオーラを放っている。

…今何て言った？ この女の子。

王女だって？ 俺、魔法かけたし、すごい失礼な態度取ったし…。

「あなたには色々と聞きた…」

「数々のご無礼すいませんでした。」

女の子改め、姫様に向かって土下座した。

地面に頭を付けて、深々と…。

あれで、無礼な態度をしのだから当然だ。闇魔法まで使ったし…。

そんな俺の頭に姫様の手が置かれた。

いつの間にか、強張っていた背中が和らぎ、モヤモヤとした気持ちも薄れてきた。そして、アンナさんたちのことも…。

何故かはわからない。

ただ、その手から温かい物が流れ込んできた気がする。

それがすごく心地よく感じた。

そして、そのまま俺の意識は光に包まれていった。

## 第8話 地獄の業火（後書き）

いかがでしたか？

展開が早いのではないかとちょっと不安です…。

ご意見、ご感想お待ちしております。

ちよつと気になった点などでも構いませんので感想いただけると励みになります。

## 第9話 朝食（前書き）

こんにちは！

今回は王が登場です^^

それではどうぞ

## 第9話 朝食

目の前で突然、土下座した青年。名前はタツヤというらしい。私のことを知らない人などいないなどという過信をしていたので、女の子といわれたときには本当に驚いた。

別に悪気があったわけでもないし、姫という立場を考えずに接してきてくれる人など本当に久しぶりだったので少々うれしいとも感じた。

そのためか、自然とタツヤの頭に手を置いていた。

私は、光属性を持つ者。

光属性はなにも、治癒魔法が専門なわけではない。

光属性の性質は恩恵と天罰の2種類だ。

王国を治める立場の人間である私達は、いつの時代でも人々の希望とならなくてはならない。

そのためには、たとえどんな犠牲を払うこともいとわない。…これが王国の信念である。

それにしても、このタツヤという青年は何者なのだろうか？

闇魔法を操る者など初めて見た。記録では過去にも数人いたそうだが、すぐに魔力暴走を起こして亡くなったという。

ニーナの言うとおりわからないことが多すぎるのだ。

そして、この青年は一体どんな目にあってきたのか？

一番知りたいのはそこなのかもしれない。

先ほど一瞬見せた闇魔法。…あんな恐怖を感じたのは初めてだ。

そのような力を持つにも関わらずときより見せる寂しそうな表情が、

何故か気になる。

そんなことを考えながら、青年の頭に手を置いていたのだが…突然ふっと力が抜けたように青年は倒れた。

慌ててニーナが近づいてきたが、どうやら寝てしまったらしい。

姫の私室で、寝るとはなかなかいい度胸ね。と内心想いつつ、兵士を呼んで来賓室に連れて行くよう命じる。でも、彼の表情はどこか明るく私が看病していた時のうなされているような様子はなかった。ニーナもそれに付いていった。

「さて、私も今日は休みます。」

使用人にそう告げて、ベットにずっと入り込んだ。

\*\*\*

俺は光の中にいる。

何処からともなく、ミカエルの声が聞こえる…。

「アンナもオリクも村の人々も無事に天界に導かれました。あなたの地獄の業火で殺された者たちは地獄であなたが経験した『死の眠り』に着きました。」

オリクさんとアンナさんは天界にいったのか…よかった。  
そう思いながら、光の中を漂う。

『私達は、ここから見守っているわ……』  
『いつまでもメソメソすんなよ？……』

そんな声が聞こえた気がした……………。

\*\*\*

バサッ。ふかふかの毛布と共に俺は起き上がった。  
視界に入ってきたのは、見知らぬ壁。いや、見たことのある壁と天井だった。

「なんで、ここにいるんだ？ 確か、姫様に土下座してたんじゃない？」  
そんなことを呟きながら布団から這い出した。

そして、昨日抜け出したドアからそおっと外に出ようとしたのだが……。

「おはようございます！」  
という元気な声と共に部屋の中に押し戻された。

そこに立っていたのはメイドさん。そう、本物のメイドさんだ。  
「え……？」

頭の中がまだ、寝ぼけているのか状況についていけない。

「さ、シャワーを浴びてきてください」  
そついいながら、部屋の中にある木製の扉の中に俺を押し込む。

いつの間にかメイドさんは3人に増えていた。  
「え？ え？」

「はい。失礼します。：あら、いい身体つき！」  
いつの間にかこの世界に着てきたコートとカットシャツを脱がされる。

そして、ジーンズに手が掛かったところで目が完全に覚めた。

「ちょっと待った！！ 自分でやるからいいです！」  
慌てて、メイドさんから距離を取る。

「残念…。では、こちらのタオルをお使いください。私達は扉の向こうに待機していますので、着替えはこちらの物をお使いください」  
そういつて、メイドさんたちは扉から出て行った。

「なんだっただ… いったい？」  
そう思いながらも、シャワーを浴びる。

欧米方式なのか、浴槽に水は溜まっていない。  
どうやら、その中で身体を洗うようだ。

風呂の手すりは金色でいかにも高級そうだ…。

頭や身体を洗うと水が黒くなった。

それには泥や塵も含まれていたが、一部触れると赤くなる物。つまり、こびり付いた人間の血液も大量についていた。

それを丁寧に洗っていき、もとの真っ黒の髪に戻った。

鏡を見ながら、洗っていたのだが自分の瞳が紅いことにはやはり違和感がある。

そして、ゆっくり立ち上がり身体を拭いた。

風呂から出ると綺麗にたたまれた洋服と下着が置いてあった。  
驚いたことに下着は日本で使っていた、物に限りなく似ていた。そ



して、洋服は黒を基調としたものだった。  
着てみると何故かサイズもぴったりで肌触りもいい。  
まんぞくしながら、扉を開ける。

「お加減はどうでしたか？」

「よかったよ。ありがとね」

そこに立っていたメイドさんに一礼した。

「それは、良かったです。では、早速ですが朝食の席にご案内します」

「朝食の席？ 部屋で食べるんじゃないの？」

「いえ。我らが主が朝食に招待することを希望されておりますので……では、こちらです。」

そついいながら扉を出ると、昨日の廊下を逆方面に歩いていく。

俺の周りを3人のメイドさんが囲んでいるので俺は、ついていくしかなかった。

そして、しばらく歩いたところで一際大きな扉にたどり着いた。

「タツヤ様をお連れしました！」

メイドさんが扉をノックしながら、そう叫んだ。

すると、扉が内側に自然と開いた。

中には長机と大きな椅子が置かれていた。

そして、その椅子には威厳のありそうな男性とおしとやかそうな女性。そして、昨日の姫様が座っていた。

「待っておったぞ。さあ、席に着きなさい」  
そういつて、男性が俺に座るように言った。

俺は、メイドさんに椅子を引いてもらいちょうどその男性と向かい合うように座った。

姫様がこちらを見てニコツとしたような気がしたが気のせいだろう…。

そして、俺が席に着くと料理が運ばれてきた。  
カボチャスープのような物で、のどあたりが非常に良い。

「食べながらで構わないから聞いてくれ。まず、軽く自己紹介をしておく。わしは、このアルバニア王国の王、ジェイド・エヴァン・ヴィ・アルバニアだ。」

スープを飲んでいた俺は嘔き出しそうになった。  
一国の王の前で暢気にスープなど飲んでいていいはずが無い…。  
しかし、昨日まで全く食事を取っていなかったせい、手が止まらない。

「遠慮などせんでよい。どんどん、食べたまえ。さて、早速本題に入るがわしは君に感謝と謝罪をしなければならない。」  
そついいながら王はマグカップでコーヒーを一口飲んだ。

俺の元にもサラダが運ばれてきた。

「まず、『ベルグ盗賊団』を壊滅させてくれたことに対しお礼を言わせてもらう。ありがとう、本当に助かった。あの村には盗賊団の

殆ど全員が来ていたようで、いまや残党も数えられるほどしかない。そして、先日アジトの位置の特定に成功し完全に壊滅した。これは、君のおかげと言えるだろう。」

「光荣です」

サラダを食べ終わった俺が咄嗟に返事をする。

何かのステーキが運ばれてきたので直ぐにそちらを食べ始める。態度がなっていないとはいえ10日間何も食べえていなければ、こくなるのかもしれないだろう…。

「うむ。しかし、その功績には多大な代償が付いてしまった。そう。村人達、総勢201名の死だ。君には生き残った者としての重圧をかけることとなってしまった。これは、王としての失態だ…。本当に申し訳なかった」

そういつて深々と頭を下げてきた。

さすがの俺もこれにはびっくりして

「やめてください。あの村が襲われたのは誰のせいでも無いです。悪いのは盗賊のほうであって、決して王様のせいではないです！」

「しかし…罪の無い彼らが無残にも殺されたのだ。君の家族もいたのだろう？」

何か、王様は勘違いしているようだ。

「俺は、あの村には王国の騎士が到着する1週間前に着いた、ただの旅人です。家族なんてもうこの世界にはいません」  
そう。家族は皆、地球にいるのだ。

「すまない。悪いことを聞いたな。では、なぜ君はあの盗賊を殺し

ただ？ 逃げればよかったんじゃないのか？」

「…それは、できませんよ。一週間とはいえお世話になった方がいましたし、自分の力で誰かを助けられるなら喜んで力を使いますよ。…結局、誰も救えませんでした」

俺の言葉と共に部屋が静まり返った。

俺は残っていたステーキを口の中に放り込んだ。

「それでも、貴方のおかげで亡くなった方も報われたんじゃないかしら？」

今まで口を一切挟まなかった、女性が口を開いた。

「ええ。昨日は、色々取り乱しましたが今はそうであって欲しいと思ってます」

そう。アンナさん達は天界でこれから生活していくのだろうかから報われるだろう。

それを聞くと女性はにつこりとほほ笑み

「ならよかった。あ、自己紹介がまだでしたわね。私はこの人の妻。アルバニア王国の王妃、エリス・エルサレム・ヴィ・アルバニアよ」と言った。

…え？ この長机に向かい合っている人、全員王族なの…？  
ちよっと待って？ 俺ってただの一般市民だよな…。

もう頭の中が大混乱だ。

「そう構えるでない。ここは別に公の席でも無いのだから、気楽に

すればよい。」

俺の様子を見ていたのか、食後のコーヒーがグットタイミングで運ばれてきた。

「さてと…。悪いが皆の者、席を外してもらえないか？」

「……は！」「……」

その命令に答えるメイドさんと護衛の騎士。

そうして、部屋の中には俺達4人だけになった。

「さてと…食事も済んだようだし、君をここに呼んだ本当の理由を話すでしょう」

先ほどまでとは違い、少々表情が硬くなる王様。

「君をここに呼んだのは、今朝、娘から非常に興味深い情報を聞かせてもらったからだ」

「はい。覚悟は出来ております。それで、自分はどのような罰を受けるのでしょうか？」

「何を言っておるのだ？ 罰など何も無いのだが…」  
首をかしげる王様。

「へ？ 自分が姫様に魔法を使ったことで罪に問われるということでは無いのですか…？」

そう。昨日、俺は一国の姫様に魔法を行使して半泣きにさせたのだ…。

「ああ。その話が…。本来なら罪に問うだろうが、今回はそのよう

なことは問題外だ。単刀直入に聞こう。君は闇魔法が使える上、セラフィストというのは本当かね？」

「…はい」

俺の言葉にピクツと反応する王様。

「本当なのだな…。出来ればこの場で見せてもらえないだろうか？  
頼む」

本日2度目となるが、王様が頭を下げた。

「やめてくださいって！ 使う分には問題ないのですが、そのお…」  
そういいながら姫様を見る。

昨日、闇魔法を使ってせいで放心状態になったのだから…。

それを察したのか姫様が

「構いません。私も昨日のように、なりませんから…」  
と答えた。

「そういうことだ。早速、頼む」  
そういつて、こちらをじっと見てきた。

「わかりました」

すつと椅子から立ち上がり、先ほど入ってきた扉の前に立った。  
そこで、王様達のほうを向き、深呼吸した。

イメージする。

炎が、闇が自分を包むことを。

すべての攻撃を退け、すべてを切り裂く刃となる物を。

イメージする。

炎も闇も俺の身を離れることは無く。この場の何者も傷つけないことを。

「ダークフレイムメール」

俺は、その言霊と共に魔力を流し込んだ。

\*\*\*

先程からこの青年を観察しているが、正直なところよくわからない。

わしが王ということを知らないところを見ると他国の者なのだろう。

黒い髪をしているから、レガビアンかと思ったが魔法を使ったという報告があったから違うのだろう…。

そして、娘から聞いて半信半疑ではあるが闇魔法を使える上にセラフィストであるという…。

この場に招いたのはそれが嘘か真か<sup>まこと</sup>を確かめるためである。

魔法を使ってくれるように頼んだが、案外あっさり受け入れてくれたのは助かった。

そして、わしら3人の視線は扉の前に立った青年に注がれている。

「ダークフレイムメール」

そう静かに呟いた青年の瞳がキラリとひかり赤みが増した。ルビーのようなその瞳には、神秘性すら感じられた…。

……しかし、わしの目の前の光景のほうが異様さを放っていた。

黒い影。

そういえばいいのだろうか？

青年を纏った黒い炎。

そこから、鎌のような物が数十本飛び出しこちらを向いている。  
殺意は感じられないが…恐ろしい。

わしが今まで見てきた、どんな強敵よりも禍々しいものだ…。

彼自身が私の恐怖という感情そのもの。

そんな風に思ってしまうほどに。

ゆらゆらと蠢く炎。

しばらくわしはその様子をただ見ていた。

部屋の温度が10度くらい下がったとさえ思った。

青年はこちらを見据えながら、静かに口を開いた。

「…こんなものでいいでしょうか？」

禍々しい気配の中だが先程と同じ口調の青年。

「ああ、構わない。よくわかった」

シュンツと音を立てて、魔法が胡散した。



わしは確信した。

この者は、危険すぎる…。

盗賊団をたった1人で殲滅したという話も、若干疑っていたのだが間違いない。彼がやったのだろう。

しかし、処刑するわけにもいかないし…管理するにしても、この者の力の底が全く見えない。

どうしたものかと考え込んでしまう。

「本当に、闇魔法が存在するなんて驚きましたわ…。どちらで習ったのですか？」

動揺しているわしを尻目にわが妻、エリスが青年に話しかける。

青年はゆっくり席に着きながらそれに答えた。

「魔法を覚えたのは、あの村が襲われる数日前です。俺は、家族も友人もいないまま施設で育ちましたから…。まあ、教えてくれた人はもう…」

俯く青年。

これには、さすがに驚いた。

魔法を覚えて2週間ほどで、この実力。施設ということは孤児院か何かだろう…。魔法を覚えるのには金が掛かるから実力が発揮できなかったというわけか…。

きつと、彼は施設を出てあの村で、初めて良い人に出会ったのだろう。そして、その人たちを殺され怒り狂い魔力暴走を起こした。

わしの中でいくつもの予想が生まれる。

しかし、俯く青年を見て思ってしまった…なんとかしてやりたい。

先程まで処刑すら考えたのが嘘のように彼のために何かしてやりた  
いと思った。

もちろん。盗賊団殲滅の褒美はもともと与える予定だったのだが…。

そんなことを思いながら、パンパンっと手を打った。

## 第9話 朝食（後書き）

いかがでしたか？

公開して早くも1週間経ちました。

そろそろ毎日5000字が厳しくなりそうです><

お気に入りに入れてくださっている方々いつもありがとうございます。

## 第10話 友達（前書き）

ついに、話数が2桁になりました。  
これからもよろしく願いします^^

それではどうぞ

## 第10話 友達

パンパンッ。

王様が手を叩くと扉から先程のメイドさんが入ってきた。

ずっと外で待機していたのか疑問に思ったが、メイドさんは嫌な顔一つしていない…。

「コーヒーをもう1杯頼む」

王様がそう言うと、メイドさんは一礼して全員分のマグカップを回収した。

「とりあえず先程の話は内密にな。さて、まだ話さなくてはいいことが山積みなのだが、まずは君の報酬の話をしよう」

先程とは違うメイドさんが、まだ湯気が出ているマグカップを配り始めた。

「報酬ですか？」

「うむ。今回、『ベルグ盗賊団』の壊滅に協力した事だな。まあ、殆ど君の力なんだが、壊滅させたのは王国騎士団ということになっているのであまり大層な物はあげられないがな…」

「え…？ 俺は、ただ復讐のために数多くの命を奪っただけですよ？ それに、多大な被害も出てしまいましたし…」

「元々、『ベルグ盗賊団』のボスをはじめとする幹部には生死を問わずに懸賞金が掛けられている存在じゃ。あの村にいた者だけで4人。残りの2人はアジトにいたので、騎士団によって殺されたがな。」

それに、村人の死については先程、君が言ったように誰の責任でもない。

いや、わしの責任というべきくらいだ。だから、君には報酬を受け取る権利があるのだ。」

そこで、王様はマグカップからコーヒーを飲んだ。  
俺も同じように一口飲んだ。

「そうですか……。ただ、何処の誰かもわからない俺なんかいいんですか？」

「王国に貢献するものには平等に恩恵を受け取る権利がある。それに：君については何も知らないが、わしも長年の経験から人を見る目はある。その経験から言えば君は悪い人間ではないと思う。いや確信している」

「王様にそんなことを言ってもらえるなんて光栄です  
そっぴいなから一礼する。」

「王様では無い。ジェイドだ。それで、報酬として何か欲しいものなどあつたら言ってみてくれないか？」

「失礼しました。ジェイド王。特に無いですね……。」

「無いとは欲の無い奴じゃな。うむ……時にタツヤよ。君は今後行く場所等あるか？」

少し驚いている様子だ。

だが、俺はジェイド王から初めて名前で呼ばれたことに何故か齒がゆい感じがしていた。

「行く場所ですか？ 特に無いですね…。今まで、あまり勉学を習わなかったものですから地名等がさっぱりわからない上、荷物は村と共に焼き払われてしまいましたから…」  
知識が無いことを強調するように言う。

「そうか……。では、報酬が思いつくまでは、しばらくの間は城で寝泊りするといい。その間に図書館で書物などで知識をつけることも出来るしな」

これは、予想外の提案だった。

確かに、寝泊りに困らないし、この世界の常識を得ることも出来る。  
迷うことはなかった。

「本当ですか!？」

「ああ。昨日まで使っていた客間を使うといい。城内の案内は…フイーナ頼めるか？」

「はい。父様。」

この部屋に来てから、一度もしやべらなかった王女様が初めて口を開いた。

「うむ。では、早速タツヤに城内を案内してあげなさい。わしは公務に行かねばならぬからな…」

そっついながらジェイド王は立ち上がった。

「では、タツヤよ。良い1日を」

ジェイド王はそう言って奥の扉から部屋を出て行った。

取り残された俺達はしばし無言のままだった。

「フィーナ。いつまで黙っているつもり？ 早くタツヤさんを案内して差し上げなさい」

その沈黙を破ったのはエリス王妃だった。

「はい… 母様。た、タツヤさん、行きましえ… 行きますよ」

あれ？ 今、噛まなかった？

フィーナ王女は、噛んだことを無かったことにしたのか立ち上がり、扉の横まで移動した。

その途中で、王妃様が王女様に何やら耳打ちしていたが気にしないことにした。

せっかく案内してくれるのを断る理由も無いので、俺もそれに続いた。

ギーという音と共に扉が開いた。

「さあ、タツヤさん。こちらです」

そう言つて、スタスタ歩き始めた。

慌てて俺もそれに続く。

\*\*\*

娘と黒髪の青年が扉から出て行くのを見送ると近くの使用人に紅茶を持ってきてもらうように頼む。

私は紅茶のほうが好きなのだが、夫がコーヒーが好きなのでそれにあわせている。



「あの青年のおかげで、これから楽しくやっていけそうだわ」  
先程耳打ちしたことを思い出し、ふふふっと笑いながら使用人の持ってきた紅茶を口にする。

「それにしても、あのフィーナが男の子とねえ」

娘であるのと同時にフィーナは王女だ。そのため、英才教育を小さいころから施している。

そのせいで友達も少なく、特に同い年くらいの男の子の知り合いはいないに等しかった。

学校に行く前に、少しでも男の子に慣れておいて欲しいものだと思う、私だった。

いずれ、王族としての役目を負うようになる青春らしいことは出来なくなるのだから…。

自分が経験してきた人生を振り返りながらそんなことを考える。

元々、私が王家直系の血筋だったが、国の決まりで女王は認められていない。

そのため、婿を迎えたのだ。

もちろん、あの人が嫌いなわけではない。

私の場合は思いが通じていたので、苦しむことなど無かったがフィーナはどうだろうか？

私やあの人が死んだ後、フィーナが心に決めた人がいない場合は大臣の息子などが自動的に迎えられる。

そうなって欲しくない。

それに、もつと色々な世界を見て欲しい。

そんなことを願いながら紅茶をすすった。

\*\*\*

「ここがエントランスホールになります」

そういつて王女様が案内してくれたのは昨日、自分が捕らえられそうになった場所だった。

ちなみに、そこに行くまで王女様は一切口を開かなかった。

「左右対称のエントランスホールには、4重の結界魔法が掛けてあります。これは、戦時の時に門を突破された際の非常線としても役に立ちます。わかりましたか？」

スラスラと話す様子を見て俺は素直に感心した。昨日は良く見ていなかったが、このエントランスホールには様々な装飾が施されている。

「はい。あの銅像はなんですか？」

そういつて俺はペガサスにまたがりながら長槍を構える女性騎士の像だった。

「あれは…母様です」

「え？ 王妃様？」

あんなお淑やかな人とこの像は似ても似つかない。

もつと近くで見ようと像によると、王女様もついていた。

「この像は、フランベルジュ戦争で光の聖騎士と称えられた母を象かたど

った像です。母様はこの戦いで光の魔法を多用し、帝国の兵を次々に壊滅させていったのです」

「どうやら、王妃様は相当強いようだ。」

「他に何か質問はありやましえ……」  
クスッ。

今回は、我慢できなかった。

どうやら舌を嚙んでしまったようで涙目になっている。

クスッ。

そんな様子を見て、また笑ってしまった…。

「笑いましたね？」

まだ涙目のままだが、どうやら怒っているようだ。

「……」

「笑いましたよね？」

王者様の顔が、近づいてきた。

「……………はい」

「そうですね……。謝ってください！」

「へ？」

何を言われるのかビクビクしていたのだが…。

「だから、私の苦しむ姿を見て笑ったことを謝ってください」

「あ、はい。この度は大変失礼なことを王女様にしてしまいました。申し訳ありませんでした」

相手は、王族だ。不敬罪とかもこの世界にはあるのだろう。そう思いながら、しっかりと謝った。

「ち、違うでしょ！？ と、友達なんだからそんな固い言葉じゃ無いでしょ？」

「友達？」

「え？ 違うの…？ さつき、母様が『あの男の子とはきつといい友達あるいはもつといい関係になれるはず』って言っていたから…」  
さつき、耳打ちしたときだろうか？ きつと王妃様にも何か考えがあるのだろう…。

「自分なにかが友達でいいんですか？ 俺はただの平民ですよ？」

「そんなこと関係ないわ。貴方に治癒魔法をかけているときも目が覚めたらお話したいと思っていたのだし…」

「ん？ 治癒魔法？」

王女様に会ったのは昨日が初めてじゃなかったのか？

「はい。貴方が魔力暴走を起こした際の身体や精神へのダメージを回復させる必用がありましたから…」

どうやら、俺の身体を治してくれたのは彼女のようだ。

「それは、知らなかった。改めてお礼を言わしてもらっ。ありがとうございます」

「だから…貴方とは友達なんだからそんな畏まった口調はやめて下さい！ 昨日はもつと砕けた言い方していたじゃないですか…」

「うん。昨日はただの女の子だと思っていたからな…。それに君も、もつと自然に話していたじゃないか」

すると、王女様は一瞬もじもじして

「君や王女じゃありません。フィーナです。私の名前はフィーナです！ 昨日はニーナがいたけど今は2人きり…ゴニョゴニョ」

…なるほど。

この王女様は男との会話の経験が父親とかしかないタイプなのか…。

完璧なお嬢様タイプだな。

しかし、この世界に来てはじめての同世代の女の子だ。

ニーナさんは口には出せないが、5つくらいは上だと思うし…。

「えっと……フィーナ？」

「はい！」

俺の言葉に満面の笑みで答える王女様。否。フィーナ

かわいい…。

かわいすぎる…。

口に出そうだったのを慌てて抑えたが、それほどかわいかった。『悩殺スマイル』とかいうやつだろう。

「さつきは、笑ってすまなかった。…これでいいか？」

「はい！ 友達って感じがします！ えっと…タツヤさん」

だから…その笑顔とか恥らう姿がかわいすぎる。

しかもそれを際立たせるかのように、エントランスホールのステンドグラスから暖かな太陽の光が入ってくる。

「さて、次いきますよ。タツヤさん。」

「あ、ああ」

さつきの暗さはどこえやら、どんどん進んでいく。

どうやら、先程までは男友達にどう接したらいいのかわからなかったようだ…。

エントランスホールから外に出た俺達は、何かの建物に向かって歩いていた。

「ここから先が訓練所になります。あそこの建物は兵舎となっていますので、今回は省きます。緑の屋根の建物が魔法訓練所、青の屋根の建物が武術訓練所となっています。タツヤさんも滞在中は自由に使ってください構いません。」

フィーナのこの丁寧な口調は、これが一番自然なものらしく本人には丁寧だという印象はないらしい。

「先程も言いましたが、闇魔法・セラフィストのことは内密にお願い

いします。あくまで、炎使いということにしてください。」

驚いたところに、王族も光魔法のほかに1属性使えるセラフィストだそうだ。

これを知っているのはごく一部とのことらしいが、先程教えてもらった。

ちなみに、フィーナは水と光だそうだ。

「ああ。わかっている」

「ならいいです。では、次にいきます」

そういいながらテクテクと歩いていく。

途中に獅子の噴水などがあり、さすが王城だなと感心していた。

次に訪れたのは城から少しはなれたところにある図書館だった。

「ここが、王国図書館となります。王国中の本があるため、欲しい情報はたいてい手に入ります。しかし、中には危険なものもあるので閲覧できないものもあります。」

「へえ」

と感心しながら図書館の様子を見て回る。

日本で使われている3倍くらいの高さの本棚を使用しており、とても上の棚のものが取れそうにない。

「あれってどうやって取るんだ？」

フィーナの希望により、俺の口調は敬語でもなんでもないただの友人に話す口調になっている。

「この図書館は、上にあればあるほど危険な書物となっているの

でたいてい閲覧することができません。しかし、どうしても閲覧したい場合は將軍以上の位を持つもののサインが必要になります。まあ、図書館の係員は全員風使いなので本をとるのは楽ですよ?」  
そういつて、上のほうから本をとる係員を指差した。

「なるほどなあ……」  
妙に納得した俺達は図書館を後にした。

それから王城をくまなく案内してもらい、気付いたら日が沈みかけていた。

「それでは、タツヤさん。今日は楽しかったです。では、また明日」  
俺の客室まで案内してくれたフィーナに感謝し、部屋の中に入った。  
そこに、メイドさんが食事を持ってきてくれたので直ぐに食べ始めた。

朝、あんなに食べたのに不思議と完食することができた。

シャワーを浴びに風呂場に行くと、着替えとタオルが置かれていた。  
本当にここのメイドさんは優秀らしい…。



俺は、温まったからだのまま天蓋つきのベットに滑り込み、夢の世  
界に旅立った。

## 第10話 友達（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

## 第11話 訓練所（前書き）

昨日は投稿できませんでした。  
これから少々、更新が遅れるかもしれません。

## 第11話 訓練所

「ふあああ〜」

他では絶対に見せられない王女の一面である。

ベットに身体を投げ出し、服がしわになるの構わずに横になる。

疲れた…。

本当に疲れた…。

同年くらいの子と話したのはいつ以来だろう？

王室主催のパーティーなどで何度か貴族の御曹司と話したことはあるが、それだけだろう。

父様が政略結婚に反対してくれているおかげで、他国の王子などとは会う機会もなかった。

別にそれに不安があるわけではなく、むしろ感謝している。

しかし、今日は母様に言われたということもあるが男の子と2人きりで数時間過ごした。

人生初の経験で、最初は戸惑ったが徐々に楽しかった。

まるで、ニーナやメイド長であるヘレンさんと話しているような碎けた口調だった。

「それにしても…タツヤ。不思議な男の子だったわ。でも、王女である私をフィーナって…ゴニョゴニョ」

思い出すと無性に恥ずかしくなってくる。

あんなに、素のままに怒ったのはいつ以来だろうか？

なんか、タツヤといると調子が狂うのだ…。

タツヤが魔力暴走を起こして目を覚まさない間にも思ったのだが、何故か放っておけない存在なのだ。

始めは父様の命令で光属性の治癒魔法で精神の傷を癒していたのだが、4日後には自分からタツヤの部屋へと向かっていた。

タツヤは黒髪に真紅の瞳で闇属性と火属性を扱う。

私は銀髪に蒼い瞳で光属性と水属性を扱う

はつきり言って正反対の存在だ。

それでも、どこか似ているような気がした…。

そんなことを考えながら私は夢の世界へと入っていった。

\*\*\*

部屋に入った私の目に映ったのは、猫のように丸くなって寝ている王女殿下のお姿。

「フイーナ様。また、こんな格好でお休みになって…。明日の朝が忙しくなりそうですね…」

そう呟きながら、布団を掛けて差し上げる。

そして、部屋を後にすると

「ヘレンさん、客室への配膳終わりました」  
という声が聞こえてきた。

「ご苦労様。貴方も今日は休んでいいわ。後は、私がやっておくから」

「すみません。メイド長。お言葉に甘えさせてもらいます」  
そういつて、彼女はスタスタと去っていつてしまう。

「遠慮くらいしなさいよ…。まあ、後は日誌をつけるだけですから別に構わないのですが…」  
そうついいながら自室に戻つた。

\*\*\*

「今日もいい天気だな」

メイドさんの持つてきてくれたフレンチトーストをほお張りながら、  
そう呟く。

「そうですねえ」

この人は、昨日から何度も俺の世話をしてくれているメイドのモナさんだ。

先程、起きたときに自己紹介してくれた。

何でも、王様の命令で俺専属のメイドさんとなつたらしい。

歳は俺より2、3個上で、ブロンズ色の髪の毛が良く似合っている。

「それで、今日は訓練所に顔を出そうかと思つてゐるんだけど何か許可とか要る？」

「ご主人様がそう言うと思って、既に王様から許可は得ていますよ。」

「え？ モナさんそんなこともわかるの？ それとご主人様もやめてって」

「概の高校生がご主人様と呼ばれて喜ぶのはちょっと…。うれしいことはうれしいけどさ…。」

「いえ。王女様が昨日行っておりましたので…ご主人様ではいけませんか？ それと『さん』はつけなくいいですよ」

「ならそつちもご主人様やめて…」

「そついうわけには…」

…などと小学生レベルの口論を繰り広げていた。モナさんは意外と諦めが悪いようだ…。

「はあ。はあ。」

「ふう〜」

20分ほど話したところで決着がついた。

「それで、タツヤ様。何時行きますか？」

「こ、食べ終わったら出るよ。モナも来るか？」

「お供します。タツヤ様」

なんでも、メイドとして主人を様付けじゃないのは論外らしい。

朝食が終わると、早速昨日行った訓練所に向かった。

訓練所に近づくにつれ何やら声が聞こえてきた。  
そして、剣を交える音も…

「おお。やってる、やってる!!」

俺が訪れたのは武術の訓練所だ。

中では騎士達が、互いに打ち合いをしている。  
遠目から見る限り、真剣を使っているようだ…。

「怪我しないのかな…」

そんな様子を見て、呟いた俺にモナが丁寧に答えてくれた。

「あれは、真剣だけど先に小さな結界を張り、切れないようにしてあります。だから、あのように剣先の色が異なりまる?」  
言われて見れば、剣先が赤だったり青だったりしている…。

「なるほどね…もっと近くまで行ってみよう」

そして、俺達は武術訓練場の中にまで足を踏み入れた。

「もっと、腰を入れろ!!　そこ、怠けるな!!!!」

「すみません!!」

「素振り300回終わりました!!」



…つとまあ予想通り、鬼教官っぽい人が騎士たちをしごいていた。

「ジョマNDER將軍！ そろそろ軍議の時間が…」

男たちの声に交じって女性の声がした。

「あつ！」

咄嗟に俺は声を出してその女性のことを指さしてしまった

その瞬間、訓練していた騎士や將軍と言われていた鬼教官、そして二ーナさんの視線が俺たちに集まった。

「タツヤか？ どうしてこんなところに来ているんだ？」

「ちょっと見学がてらに来てみたのですが…場違いでしたかね？」  
そう。黒いパーカーを羽織った俺にきつちりとメイド服を着たモナさんがむさくるしい訓練所にいるのは明らかに場違いだった。

「いやいや全然かまわんぞ！ 少年！ 君にはとても感謝している  
しなー！」

先ほど騎士たちを叱っていた鬼教官が話しかけてきた。

「誰ですか…？」

感謝しているのはきつと盗賊がらみのことだろう。

「俺としたことがすまないな。俺は王国陸上部隊第1番隊長、ジョマNDER・ブリティシュタインだ。あの悲劇の翌日に村に救援としてかけつけた時に一度あっているから会うのは2度目だな。もつとも、前回は意識がなかっただろうから、実際は今回が初めてということになるだろう」

「そうでしたか…あ、俺はタツヤ。タツヤ・アカバネといいます」

「タツヤね。んじゃ俺は用があるから今日は会えないが積もる話もあるしまた、いつでも来てくれ」

そっいいながら將軍は、訓練所から出て行つた。

「いったいなんだつたんだ…？」

「きつとジヨマンダー將軍は、タツヤの实力を知りたいのだろう。將軍は生粋の戦闘狂だからな…。もちろん私もタツヤの实力を知りたいんだが…ひとつ手合わせしてもらえないだろうか？」  
そこにニーナさんがやってきた。

「手合わせですか…。ずっと寝ていて身体も鈍つていそうだから…  
…お願いします」

先程の魔法をかけておけば、傷つくことも無いだろう。

「そうか。私もこの後は時間が空いているからな。おい！ 訓練所の一部を借りるぞ」

「はい！ ニーナ部隊長」

そっいつて騎士達がどいてくれた。

そのおかげで戦うには十分すぎるスペースができた。

大きさにして大体バスケットボールコート1面分ほどだろう。

「武器は持っていないようだから…この中から好きなものを選んでくれ」

そっいつてニーナさんはある木箱を指差した。

中を覗くと大小様々な武器が入っていた。  
小さいものは果物ナイフ程度のサイズだし、大きいものは俺の身長くらいありそうな大剣だ。

その中から、扱いやすそうな日本刀のような細身の剣を選んだ。  
細身といってもさすがに日本刀ほど細くない上、両側に刃がついている。

「これにするよ」

ニーナさんに剣を見せると静かにうなずき

「では、刃に結界をかけてくれ」

要領はファイアーアームと同じで刃の一部分を赤色の結界が包みこんだ。

実際のところ、この結界はファイアーアームとは少々違うのだ。  
この魔法は自分に結界をかけるのとは逆に外からの衝撃は受け付け、中からの衝撃は吸収されるというものだ。  
つまり、結界を裏返したものだ。

「はい。できました。」

「よし。ルールはどちらかが負けを認めるまでか気絶するまでだ。  
当たり前だが殺しはなしだ。ただし、魔法の使用は禁止だ」  
何やら含みのある言い方だった。

お互い距離を取って剣と槍を構える。

ニーナさんは槍使いのようだ。

騎士の一人が審判役をかって出た。

「では、行きます。カウント3・2・1・試合開始!!」

瞬間、ニーナさんが消えた。  
いや。消えてはいなかった。

槍を前に突き出したが体制のまま、身体を限界まで傾け、突っ込んできたのだ。

8mほど離れていた距離も2mの槍にスピードも上乘せされ相当な威力になっている。

いくら結界が離れていてもあれをまともには食らえば怪我するのは確実だ。

剣でなめすなどの高等技術は俺にはない。

幸い槍には莫大な攻撃力の反面、突くと言う動作により大きな隙を生む。

だから…俺は前に走り思いっきり飛び上がった。

身体強化されている上、助走もある。

そのままニーナさんの上を飛び越えた。

反応したニーナさんが槍を傾けたが俺のほうが一步早かった。

両者が振り返り、立ち位置だけが入れ替わった。

そして、今度はこちらから切りかかった。

しかし、それはニーナさんの持つ槍にとめられてしまう。  
カッという鈍い音が訓練所内に響いた。

リーチの差があるせいでニーナさんには全然届かない。

その上、俺は攻撃範囲内にいるので防戦一方だ。

ミスった…

と思ったときには時既に遅し…

オリクさんとの時は剣同士の打ち合いだったが、今回は槍と剣だ。武器性能だけでなく立ち回りも違う。

このままでは俺の攻撃が届くことは無い。体力には自信があるが、さすがにいつまでもこうしているわけにはいかない…。

しかし、そこでニーナさんがバックステップで後ろに下がった。どうやらまた、突っ込んでくるようだ。

今度も飛び上がろうかと思ったが閃いた。

先程と同じように突っ込んできたニーナさん。なんとなく剣先が上を向いている気がした。

そこに、俺も体制を低くして向かった。

突進しているニーナさんは途中では止まれない。無論俺もだ。

ニーナさんが目を見開いて驚いているようだ。

そこに俺もは槍の横ぎりぎりを通り、マンガで見た居合い斬りを食らわせた。

「っ！」

とニーナさんが驚いたような声が聞こえた。

確かな手ごたえを感じたことから勝ったことを確信して、振り向こうとした瞬間。

首に衝撃が走り、俺は前に倒れこんだ。

…何が起った？

わからないが、俺は倒れている。

「勝者、ニーナ部隊長！！」

審判をやっていた騎士の声が聞こえる…。

「おしかつたなタツヤ」

そついいながらニーナさんが俺に手を差し伸べた。

「何が起ったんですか？ 手ごたえがあつたのですが…」

「ああ。確かにあの攻撃は危なかったぞ？だが、動作が大きすぎて軌道が簡単に予想できた。だから、受け流させてもらった」

「どうやら、俺がニーナさんに当たったと思った剣先は槍の持つ部分に当たり、俺が振り向く前に首に手刀を打ち込んだようだ。」

「それにしても、タツヤは動きは一流だが剣の扱い方は素人みたいだな」

「そりやそうですよ。剣など習ったこと無いですから」

まあ、地球にいたころに学校の剣道の授業で少しはやってはいたが…

「そつなのか？ それならば明日から稽古するか？ 最も私はやりだからジョマNDER將軍に頼むことになるが…」

ジヨマンダー將軍の厳しさは先程目の当たりしているので少々尻込みしてしまったが、この先生きていくうえで剣を習っておくのはプラスになるだろう。

そう判断した俺はお願いすることにした。

「お願いします」

きつと將軍つてことだからニーナさんよりも強いのだろう。

そう言つて俺は、ニーナさんと明日また会うことにして訓練所を後にした。

ニーナさんと打ち合えてよかったのかもしれない…

今は亡きオリクさんと結構まともに打ち合えていたから、結構自分は強いのだと調子に乗っていたのが改めて自分の弱さを思い知らされた。

そんなことを考えながら俺とモナは城に戻ることにした。

ちなみに、モナは俺が戦っている様子もじっと見ていたのだった。

## 第11話 訓練所（後書き）

今回は少々短めです。

お気に入りに入れてくれている方、感想くださっている方、いつもありがとうございます。

これからもご意見、ご感想等ありましたらよろしくお願いします。



## 第12話 闇と光（前書き）

更新だいぶ遅れました。すいません。

それでは、どうぞ。

## 第12話 闇と光

訓練所から帰ってきた俺はモナと共に昼食に向かった。  
場所は昨日王族の方々と食べた場所だ。

モナに案内されて中に入るとフィーナがいた。

「あら、タツヤさん、午前中はどこに行っていたんですか？ 呼びに行ったときにはもう出かけていたみたいですが…」  
俺も、モナに椅子を引いてもらい席についた。

「訓練所に行ってたんだよ。んで、ニーナさんにコテンパにやられたよ…」

先程やられた光景を思い出しながら答える。

「当たり前といえば当たり前ですね。彼女は学校を飛び級で卒業すると同時に、当時の隊長を打ち負かして今の位に収まる程の実力者ですから」

「それはすごいな…。ニーナさんもやっぱり貴族なんですか？」  
素直に感心した。それと同時に騎士も貴族なのかちょっと気になった。

「…ニーナは私が子供だったころにお父様が連れてきた子で、私の親友であり姉のような存在なんです。ですから、彼女は血統的には貴族ではありません」  
過去に何かあったのか、フィーナはちょっと哀しそうな表情をしていた。

「そうなんですか。でも、仲の良い姉妹みたいってちょっと羨ましいですね！」

「いえ…初めのころはそんなに仲は良くなかったんです。当時のニーナはトゲトゲしていて人を寄せつけなかったのです。ニーナは魔物に襲われていたところをお父様に助けられ、王族の専属騎士見習いとして、私の話し相手として、私のところに連れてこられました。その時のニーナの顔は本当に怖かった…。でも、月日が経つにつれて徐々に打ち解けていきました。おかげで今ではそんな感じは全然しませんね」

そう言い終わるとフィーナは運ばれてきた紅茶の入ったマグカップを手に取った

なんで、王族がわけもわからない人を受け入れたのかわからなかった。

…どういことなのか非常に気になったが、これ以上の詮索は不躰だろう。

つと俺のところにも料理が運ばれてきたので一旦会話はやんだ。昼食は米のような物が出たので驚いた。

「ごちそうさまでした」

パンツと手を合わせて空いた食器に向かって一礼する。

そんな様子をモナも他のメイドさん達も不思議そうに見ていた。

「タツヤさん、『ごちそう、さま?』というその動作には何の意味があるのですか？」

「ああ、これは俺の住んでいた地域の慣わしで食材を作ってくれた人、食事を作ってくれた人、この料理に関わった全ての人に感謝の意を表す動作だよ」

日本の良き文化をごまかしながら彼女達に説明した。

「そうなんですか…。『ごちそうさま』王族としてこれは取り入れるべきかもしれませんね…。」

何やらまじめに考えているフィーナ。

そんな様子を見ているとやはり気品のようなものが漂っている気がする。

「まあ、そんなに大げさにしなくてもいいよ。それより、さっき俺のことを探していたみたいなのを言っていたけど何か用があったんじゃないの？」

「ああ、そうでしたね。タツヤさんに魔法を教えてあげてはどうか？　っとお父様から言われていたので、どうするか確認しようと思ひまして…。どうしますか？」

王族自ら教えるのはどうなのだろうと思ったのだが…

「いいのか？　仮にもフィーナは王女様だろ？」

こんなセリフ普通に言ったら不敬罪だろう…。

「王女様扱いはやめて下さい…。友達にそれを言われるのはイヤです…。」

ちよつと泣きそうになってしまった。…ヤバイ。ヤバイ！

「ごめん！　でも、魔法ならそれこそ二ーナさんとかに教えてもらったほうがいいのかなと思ってさ」

「グスンッ。タツヤさんの魔法のことを知っているのは、私たち王族とニーナだけです。ですから、あまり人目に付く場所で練習したくないのです。それに、光と闇は文献によると似ているところがあるようなので私が直接教えたほうがいいと思ひまして」  
いつの間にか、部屋からメイドさんたちが消えていた。  
…モナを除いて。

「ああ、そうでした。モナにも大体のことは話しています。彼女のことはお父様も一目置いていたので、信用してくださって構いません。」

「なんでそんな人を俺のメイドにしたんだ…？  
疑問は重なるばかりである。」

「なんか、俺の知らないところで色々起こっているんだな…」

「ええ。彼女は護衛兼監視役です。タツヤさんのことは信用しますが、闇魔法とはやはり得体の知れないものなので…すいません  
本当に申し訳なさそうに謝るフィーナ。」

「構わないよ。俺がフィーナの立場だったら同じことするもの。こんなに良い待遇をしてくれていることのほうが意外だよ…」

「…しかし、タツヤさんのことを単純に利用しようとしているだけかもしれないよ？」  
何やらフィーナの顔に影がさしている気がした。

「利用されるだけの価値があるならいいさ。それで、誰かを救えるなら俺は構わないよ…。そのことをオリクさん達も望んでいるだろうし…」

天界にいるだろうオリクさんのように誰かを守るために必死になる。そんな生き方にいつの間にか憧れているのだった。

「…立派ですね。私と同じくらいの歳なのに、そんな考え方が出来るなんて。私なんて…」

「なあ、気になっていたんだけど…フィーナって何歳？」

え？ という顔をしてフィーナが苦笑しながら答えた。

「女性に歳を聞くのはあまりよくないことですよ。私は、今年で18になります。タツヤさんは？」

…待てよ。地球にいた時に17だったけど、あれから10年+経ってないか？

この場合って…。

「あ！ すいません。タツヤさんが育った環境は…」

今度は頭を深く下げて謝ってきた。

俺は孤児院で育ったことになっているから、当り前といえば当り前の反応だ。

「いや。気にするな。それと、俺は誕生日はわからんがフィーナと同じで今年18になる」

「え？ 本当に同い年…でも、誕生日がわからないのは。」「何やら少し考えるようなくさをするフィーナだったのだが…」

「なあ、フィーナ。俺達、話がメチャクチャ脱線していないか？」

あ！ と驚くような表情をしたのに恥ずかしそうに話し始めた。  
「そうでしたね…。それで、私がタツヤさんに魔法を教えてもいいかしら？」

「構わないというより、むしろこちらからお願いするよ」  
俺が返事をするといーナはパツと笑顔になった。

「本当ですか！ では、早速練習しに行きますか？」

「ああ。そうだな。午後は特に用事ないし…」

俺が食事を終えるのを待つて、俺達は部屋を出た。

俺達2人が廊下を歩いていて少し後ろからモナも付いて来た。

「なあ、さっきから言おうと思っていたんだけど…モナ。なんで一緒に歩かないんだ？」

「それは、メイドたるもの主人の一步後ろから…」

「別に気にしないし、俺は貴族でも何でもないんだからさあ」

「しかし、タツヤ様が私の主人であることには代わりはありませんから…」

そんな俺達のやり取りを見ていーナがクスツと笑った。

「モナ。そんなにお父様に言われたことを真剣に考えなくていいですよ。いつもそんなのでは疲れるでしょ？」

「しかし、フィーナ様…」

何か言おうとしたモナにシャーと人差し指を口の前に持ってきてフィーナがそれをやめさせた。

そんな感じで俺達はフィーナを先頭に城内を歩いていた。

「さ、着いたわ」

案内されたのは城の中でも結構端のほうに位置する石造り扉の前だった。

とても重そうな扉でフィーナの力では開きそうにもないと思ったのだが、彼女が紋章のようなものに触れると音も無く扉が内側に開いた

「ここは、王族が光の魔法を練習するために作られた場所なの。タツヤさんの闇魔法を人に見られるわけにはいけないので、お母様がここを使いなさいって…」

「お母様？」

「ええ。お父様は王族直系ではないので、光の魔法を使うことは出来ないの。王族直系はお母様ですが、この国では女王は認められないのでお父様が王を名乗っているのです。」

「完全に男女差別だな…。ところで、ここの部屋ならいくら魔法をぶっ放しても平気なのか？」

あたりを見渡しながら一応聞いてみた。

「ええ。ここの壁には光の結界魔法と水の結界魔法が重なってかけてあるから、そう簡単に壊れることはないはず…」



「なら、安心だな…。んじや早速始めてくれるか？」

「はい。でも実践前に、まずいくつか質問させてもらいます。タツさんは魔法についてどれほど知っていますか？」

「どれほどって言われても…。ただ、魔法に関する知識は本で読んだ程度だし、使い方もオリクさんに習った程度かな…」

「セラフィストや光、闇属性については？」

「詳しいことは何も…。各属性の特徴と、炎の魔法の使い方だけしかわからない」

「そうですか…。では、光と闇について簡単に話しておきましょう」  
そういつてフィーナはゆっくり語り始めた。

「魔法には基本6属性の他に光、闇属性が存在していることは知っていますね。私達が使っている光、闇については殆ど文献には記されていません。これは、秘密を守るためと謎が多いからです。一般的に光属性は創造を、闇属性は破壊を司っています。しかし、光や闇というのは完全に定義することは不可能な存在です。そのため、術者によって全く違った魔法を発動するのです。私達王族でも、私は水と光のセラフィストということもあり回復系統が得意ですが、お母様のように風と光のセラフィストだと疾風迅雷。つまり、高速攻撃を得意とします。闇属性については、なんとも言えませんがタツさんは、炎と闇なのでたぶん…大規模攻撃魔法を得意としているはずです。だからというわけなのかはわかりませんが光属性はコントロールすることが非常に難しいのです。それは、イメージするのが難しいということだけでなく闇魔法は特にだと思えますが心を強くする必要があるのです。光属性の場合、誰かを治療する際に断

片的ではありませんが対象の痛みや苦しみが伝わってきます。タツヤさんに闇魔法を見せてもらった時の恐怖から考えると相当心を強くないと闇魔法を使いこなすのは難しいと思います。それに、光単体、水単体のように属性を使い分けることもできるようにならなくてはいけないし……」

ふう〜と言いながらフィーナが息をついた。

「まあ、説明ばかりではわかりにくいので実際にあの的に向かって闇魔法のみで攻撃してみて」

フィーナはそう言いながらわらわら人形のようなものを指差した。

イメージする。

闇。黒。人差し指くらいの黒い弾丸。

イメージする。

まっすぐに当たり、破壊する。

イメージする。

魔力の蛇口をひねる。

「ダークショット！」

そういいながら俺は指を前に突き出した。

その瞬間ふわっと、俺の身体の周りを黒い煙のような物が渦巻き始めた。

それは次第に大きくなり。  
プツツと消えてしまった。

「あれ？」

俺のイメージしたのは黒い弾丸なんだけどなあ…

「やっぱり…」

「どういうことだ？」

何かわかったようなのでフィーナに聞いてみる。

「昨日見せてもらった魔法なんだけど…あれは闇魔法ではなく、火属性の魔法の上から闇の魔力を放出している物なのだと思うの。黒い鎌についてはちょっとわかりませんが、あの鎧に関しては闇魔法ではないと思います。光を単体で発動する場合はあの様に一定の形を保つことは難しくどうしても形が定まらないことが多いのです。つまり、タツヤさんは闇魔法を純粋に扱うことはまだ出来ないということですよ」

「なるほどな…。んじゃあどうすればいいの？」

「タツヤさんは詠唱していないところを見ると自分の魔力をしっかり認識できているわね？」

「まあ…」

「なら、自分の中の魔力が火の属性のものと闇属性のものに分かれているのを確認して闇魔法のほうの魔力だけを使って魔法を発動してみてください」

「うーん。なんか火と闇が混ざっているような気がするんだけどなあ…」

「それは、まだ認識が完全ではない証拠。もっとしっかり認識して」「フィーナはなかなか厳しいようだ。」

「とりあえず、やってみるよ」

イメージする。

闇。黒。人差し指くらいの黒い弾丸。

イメージする。

まっすぐに当たり、破壊する。

イメージする。

魔力の蛇口をひねり、黒い魔力のみをしぼりだす。

「ダークショット！」

再び人差し指を的にむけ、俺は叫んだ。

人差し指に黒い弾丸のような物が現れ、的に向かって飛んで……いかなかった。

弾丸が俺の人差し指のところに現れたのだが、すぐに形が崩れ始め胡散してしまった。

「まだ、駄目か……」

「闇の魔法をコントロールするのは難しいことですから気長にやっ  
ていきましょう」

フィーナに励まされながら俺はその後、何度も何度も的に向かって闇魔法を撃つのであった。

「やっぱ、出来ないな…」

約2時間撃ちまくっていたのだが、あまり進歩が無い。

「…すごい魔力量ですね。こんなに撃っても魔力切れにならないなんて」

そう。進歩は無いと言っても弾丸自体は構成できるようになったのだ。

しかし、制御不能でさっきからフィーナやモナがしきりに結界を張って自身を守っている。

「ダークショット！」

黒い弾丸が俺の指から発射される。

ものすごいスピードで飛び出していったが、まるで生き物のように無作為に動いていく。

しばらく四方八方に動いていた弾丸だが俺のこめた魔力が消えるとシュンッと消えた。

「また、失敗か…フィーナもう一回見せてくれ」

「わかりました…。でも、私もそろそろ体力がきつくなってきたのでこれがラストですよ」

「うん。それで、かまわないよ。お願い！」

「しかたないですね…『ホーリジャベリン!』」

フィーナが手を前にかざすとゆらゆらと形を保っている光の槍が空中に浮いていた。

そして、フィーナが手を振りかざすと同時に槍は的に向かって一直に進んでいき、的の頭の部分に命中した。

「やっぱ、すげえな…」

「タツヤさんもコントロールさえ出来るようになればこれぐらいのこと簡単にできますよ。とりあえず、私も魔力が限界ですので今日はこれで、終わりにします」

そうついいながら、俺達は部屋の片づけを始めた。

## 第12話 闇と光（後書き）

いかがでしたか？

いつの間にか、お気に入り登録も130件を超えて正直驚いています。

まだまだ、未熟者ですがこれからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想等ありましたらよろしく願います。

### 第13話 新たな可能性（前書き）

お久しぶりです。

いろいろありまして、10か月近く放置してしまいました。  
以前、打った文章が見つかったのでUPします。



### 第13話 新たな可能性

俺たちは部屋の片づけを簡単に済ませた後、部屋を出た。

つといても、片付けはフィーナが終わらせたのだが…。

「お疲れ様です。フィーナ様。タツヤ様」

外ですと待っていたのだろうかモナが声をかけてきた。

「モナ、ずっと待っていたのか？」

「はい。この部屋は王族の許可がない限りは入ってはならない部屋です…。それとフィーナ様、同盟国であるグスタリカ国から使者が到着したそうなのでそちらに向かってもらえますか？なんでも新たな発明品ができたことなんで…」

「わかりました。早速向かいましょう。応接室でよいかしら？」

「はい」

「では、いきましよう。タツヤさんもきますか？ドワーフの方々の発明品は面白いものが多いですので楽しめますよ？」

「行っているのか？そういうのは王族とか外交官だけじゃ…」

「かまいませんよ。私の連れということにしますから。それに、ドワーフの一番の喜びは自分たちの作品が完璧にできた時とその出来具合に驚く人々の顔ですから…」

「いかにも職人って感じだな。じゃあお言葉に甘えて一緒にさせてもらおうかな。」

（…にしてもこの世界にはドワーフなんかもいるのか。何ができたのかメチャクチャ気になるところだな。）

そんなことを考えながら俺たちは応接室へと向かった。

\*\*\*

コンコン。

応接室のドアを開くと中にはソファーに腰かけているちよつと小柄だががっしりとした肉体のいかにもドワーフみtainな人が2人と先日会ったジヨマンダー将軍がいた。

「遅くなつてしまい申し訳ありません。アルバニア王国第一王女。フィーナ・エルサレム・ヴィ・アルバニアです。この度はわざわざお越し頂きありがとうございます。本日は何やら発明品をお持ち下さったとお聞きました。」

「おお。フィーナ様、前回のご視察時にわれわれへの多大な配慮、とても感謝しております。そのおかげで今回は今まではない完成度を誇るものを完成させることができたのです！」そういうとわきに立てかけて置いてあった、1m50?ほどある木箱を机の上に置いた。

何やらドワーフの指がキラリと光ったかと思うと木箱がギィーと音をたててゆっくり開いた。

「こちらでございます」

俺たちはそつと中を覗き込む。

「こちらは、鉄鉱石をベースに錬金、鍛練を繰り返して内部に一切の突起やへこみのない筒を作り上げ、その中を火の魔法により作り上げた着火薬を爆発させ、そのエネルギーで鉛の塊を高速で通すという武器です。風の魔法に匹敵する速度で鉛の塊を飛ばすことを可能にした我等の最高傑作であります！」

「「おおお」」

近くの衛兵やジヨマンダーは感嘆の声を上げている。

そう。

中身は銃だったのだ。それも、現代の銃ではない。歴史博物館でみた火縄銃のような感じのもので、溶接などが手作り感ありふれている。しかし、刻み込まれた模様などは神業としか言いようのないものであった。銃自体が一つの芸術と化している代物だった。

「いかがで…」

「なんで銃がここにあるんだ??」

俺の驚きの声とドワーフの声が被ってしまった…

ドワーフに一瞬睨まれたがそこまで気にしなかったようだ。

「ウオホオンツ。フィーナ様、將軍閣下これは魔法を使用しないので攻撃位置を敵に察知されにくく、戦時に敵の飛行部隊を撃ち落とすのに役立つかと…」

そっぴいながら、ドワーフは銃を箱から取り出した。

「そうですか。…ところでタツヤさん。少々気になったのですが『銃』とはなんでしょうか??」

「うむ。ワシもそれは気になった」

ジヨマンダー將軍も乗り出すように聞いてくる。

ヤバい…痛いところを突かれてしまった。

自分のことを忘れられたかのうような仕打ちを受けたドワーフはやたら不機嫌そうな顔をしている。

なんとかごまかそうと頭をフル回転した結果：

「ああ。銃というのは俺が昔読んだ本に構想だけが書いてあったものなんですよ。だから架空のものだと思ったんですが、それを実際に作ってしまうなんて…。ドワーフの技術力の高さに驚かされました！」

それを聞くとドワーフがやたら上機嫌になったようだ。

やはり、こういう技術者はおだてられると弱いようだ。

まあ、口が裂けても、地球には秒間数十発連射できるものがゴロゴロ存在するなんて言えない…

「いくら口で説明して詳細なことは伝わらないでしょうから、実演させていただきたいのですが…」

「うむ。なら魔法実戦場を使うといいだろう」

そういつてジヨマンダー將軍は近くの衛兵に何やら耳打ちする。

ドワーフ達が木箱を閉め、背中に担いだのを確認するとモナがドア

を開けた。

「それでは、ご案内します」

そのままモナ、フィーナ、俺、衛兵、ドワーフ、衛兵の順で俺達は魔法実戦場に向かった。

「…こちらになります」

モナの声を聞き顔を上げるとそこは訓練所の脇にある体育館くらいの広さの建物だった。

人払いをしたのか訓練所のほうにも人はいないようで、剣を撃ち合う音もしない。

中に入ると、人の頭ほどの大きさの的や消しゴムくらいの大きさの的など、様々な大きさの的がいくつか設置しており、中には動くものもあった。

「それでは、実演させていただきます」ドワーフはフィーナに一礼すると、近くに置いてあった机の上に木箱を置き、中から銃を取り出した。

「まず、上部の穴にこの球体を一ついれます。あ、これには起爆薬が入っております」

そういつて銃の上に開いてる小さな穴に球体を入れた。

「続いて、ここを引き鉛の玉を詰めます」

ドワーフは銃の右側のレバーを引いて、そこにできた空間に小指の

先程の大きさの鉛の塊を入れて、レバーを元の位置に戻した。

「そして、狙いを定めてこの部分を人差し指で引きます」

ダーンッ

という音と共に的の一つが吹き飛んだ。

「むむ！！これはすごいですな！！」

「…確かにすごいですね！」

フィーナは音に驚いたのが発砲時にビクツと体を震わせたが、すぐに冷静さを取り戻したようだ。

ドワーフは、これらの反応にどこか得意そうなまま銃を縦に持ち替えた。

「そして撃ち終わりましたら、先程と同じように起爆薬を入れてください」

そう言っただけで先程と同じように玉と起爆薬を入れ終わるとドワーフはまた、発砲した。

ダーン……カチャカチャ……ダーン……カチャカチャ……

つと約30発ほど撃つと再び銃を箱の中に戻した。

ドワーフが撃つを見ていたジヨマンダー将軍がふと口を開いた。  
「すまぬが、わしにも撃たせてもらえないか??」

『おお。將軍閣下には是非とも試射していただかないとでした!!  
申し訳ありません。是非とも撃ってください。』

そういつてもう一人のドワーフはジヨマンダー将軍に銃を渡した。

「ふむ。こんな感じか」

そういつて、的に向かって引き金を引いた。

ダーン。

場内に銃声が反響している。

「これはなかなか良いものだな!!」

そういつとジヨマンダー将軍は新しいおもちゃを与えられた子供の  
ように楽しそうに銃を撃ち始めた。

「うむ。これは是非とも次の議会の議題に上げることにならせてもら  
う。」

ある程度撃った時点で、満足したのか銃をドワーフに返しなが  
らジヨマンダー将軍が言った。

「はっ!!もつたいなき幸せです。」

そういつてドワーフは深くお辞儀をした。

そんな様子を見ながら俺は、一つの考えがぱつと浮かんだ。

「すみません。その武器の弾に魔力を込めること可能ですか？」

俺の問いに一瞬、ドワーフは眉間に皺を寄せた。

「先ほども言ったのだが、これは魔力を感知されないことが売りのもので、魔力を込めるようなことをしたら一瞬で位置を教えてしまうではないか！まあ、ミスリルとかの魔力伝導性の良い物質で弾を作ればできないことはないが、1発あたりの値段が跳ね上がるがな  
！！」

そっついながらシッシと俺に手を振った。

（意外とこれはいけるかもしれないな…）

俺の中である考えがかなり具体的なイメージとなってきた。

その後、ジョマンダー將軍とドワーフ達は別室に行き、俺達は夕食の席に向かった。

扉を開けるとジェイド王と王妃様が既に席に着いていた。

「おお、待つておったぞタツヤ。」

そっついながらジェイド王は席に着くようにうながす。

「お待たせしてしまい、申し訳ありません」

いくら普通に接してくれているとはいえ、ジェイド王はこの国の国王だ。最低限の礼儀は忘れてはいけない。

「構わんよ。それで、魔法の訓練は順調かな??」

「いえ…。闇魔法を凝縮した弾丸は作れるようになったのですが、



制御がうまく出来ず、なかなか上手くいきませんでした…」

せっかく教えてくれたフィーナに申し訳ない気持ちもあり、軽く俯きがちに答えた。

「ふーむ。まあ、魔法は一日や二日どころか一年以上かけて初めて形あるものとして発動出来るようになるのが普通ではないのか？その点、タツヤは2週間足らずで魔法を発動出来ているのだから、既に十分早いペースで学んでいるのではなからうか」

「そうですよ！それにタツヤさんの魔力の持続時間はとてつもなく長いですから、絶対大丈夫です！！」  
フィーナもすかさずフォローしてくれた。

「フィーナよ、持続持続が長いと言うのはどういうことだ？？」

「文字通りの意味です。お父様。タツヤさんは2時間以上休憩無しで連続して魔法を発動し続けていました！！いくら消費魔力の少ない簡易魔法とは言え、かなりの破壊力があつたので、魔力量に関しては一般的な者の数倍いえ数十倍はあるかと思われます！」

「それは、凄いですわね」

エリス王妃がこちらをじっと見ながら、そう言ってきた。

「魔力量を増やすのには大変時間がかかるものですから、元々の魔力量が高いことにこしたことはありません。私たち王族が使う光属性は消費魔力が高いと言われています。ですから、対の存在である閻属性も消費魔力が大きいでしょう。それに合わせ、魔力量も多いのだと思われます。」

エリス王妃はマグカップを持ち上げながら言った。

「とりあえず、明日からもフィーナと協力し魔法の練習は続けていくとよいと思うぞ?」

ジェイド王の誘いを断る理由もないので俺はこれを了承した。

そんなことを話しているうちに外は真っ暗となり、そんなか食事を終え、俺とフィーマナは部屋にもどったのだった。

### 第13話 新たな可能性（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからも、チヨコチヨコUPしていけたらいいなあ〜と思います。

誤字脱字・ご意見・ご感想等ありましたらよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7703o/>

---

真紅の瞳に映る世界

2011年9月11日00時57分発行